

Title	ドイツ社会史再訪：歴史学のパラダイム転換？
Sub Title	German social history revisited : paradigm shift in historiography?
Author	矢野, 久(Yano, Hisashi)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2016
Jtitle	三田学会雑誌 (Mita journal of economics). Vol.109, No.1 (2016. 4) ,p.1- 48
JaLC DOI	10.14991/001.20160401-0001
Abstract	<p>本稿では、1970年代後半から80年代半ばに(西)ドイツの歴史学において議論された問題、「歴史的社会科学」か「社会史の文化論的転回」かという議論に焦点を当てる。歴史的社会科学とそのパラダイムに対抗した「日常史」・「歴史人類学的社会史」における歴史研究の方法と観点、問題設定や研究対象に関する議論を追い、この「社会史の文化論的転回」への歴史研究の展開過程を解明する。欧米の歴史学との比較において(西)ドイツ歴史学の特徴を浮き彫りにする。</p> <p>This study focuses on a problem discussed from the mid-1970s to the 1980s in West Germany : the controversy over „historical social science" or „cultural turn in social history." This study follows discussions regarding approaches, aspects, question setting, and subjects of historical studies in „everyday history" (Alltagsgeschichte) and „anthropological social history" (Anthropologische Sozialgeschichte) as opposed to historical social science and its paradigm. Further, it investigates the process of how the „cultural turn in social history" evolved. In addition, this study compares (West) German historiography with traditional and social science historiography, in the process clarifying its characteristics.</p>
Notes	会長講演
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20160401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ドイツ社会史再訪

——歴史学のパラダイム転換⁽¹⁾? ——

矢野 久*

German Social History Revisited:

Paradigm Shift in Historiography?

Hisashi Yano*

Abstract: This study focuses on a problem discussed from the mid-1970s to the 1980s in West Germany: the controversy over „historical social science“ or „cultural turn in social history.“ This study follows discussions regarding approaches, aspects, question setting, and subjects of historical studies in „everyday history“ (Alltagsgeschichte) and „anthropological social history“ (Anthropologische Sozialgeschichte) as opposed to historical social science and its paradigm. Further, it investigates the process of how the „cultural turn in social history“ evolved. In addition, this study compares (West) German historiography with traditional and social science historiography, in the process clarifying its characteristics.

Key words: historical social science, Alltagsgeschichte, anthropological social history, social history, cultural turn in social history

JEL classifications: Z13

-
- (1) 本稿は 2014 年 12 月 18 日に開催の慶應義塾経済学会会長講演「ドイツ社会史の方法と課題——個人史的回顧——」を基にしている。本講演においては個人史的回顧と関連させてドイツ社会史とその変遷を考察したが、本稿では個人史的回顧の部分は削り、もっぱらドイツ社会史内部での議論を中心にして書き下ろした。

* 慶應義塾大学
Keio University

I. はじめに

2002年、ドイツ企業史研究の方向転換を企図した研究書が公刊された。1990年代から2000年代にかけての企業史研究の新しい方向性、すなわち企業史の「文化的転回」と「マイクロ経済=制度経済的転回」を展望する「中間決算」である⁽²⁾。その中に筆者の論文「西ドイツ初期の炭鉱労働移民」もその一環として掲載されている⁽³⁾。

編者のヘッセ (Jan-Otmar Hesse)・クラインシュミット (Christian Kleinschmidt)・ラオシュケ (Karl Lauschke) が「序論」で示しているように、企業史における「文化的転回」は1990年代半ば以降のドイツ歴史学における文化概念の再活性化に対応する。これは、企業の「マイクロ政治 (Mikropolitik)」を問う歴史学であり、企業の交渉・決定過程の偶然性から出発して、一種の文化システム (Kultursystem) として企業史を展望する方向性である。企業史の「文化的転回」とは企業史の文化主義的拡大を意味する。この企業史の文化主義的方向は「社会史における文化論的転回」に発している。そしてこの社会史の文化論的転回は、社会的・政治的・経済的なものの構造と、これらの構造を再生産し変化させるアクターの行動と思考、経験と知覚との二重性として社会的現実を考察する。経済学における「マイクロ経済的転回」に関していえば、企業を「文化」と「社会的関係」として把握しようとする方向性であり、「企業コミュニケーション (Unternehmenskommunikation)」概念という表現がなされている⁽⁴⁾。

本稿との関連で重要な点は、社会史の文化論的転回の出発点は、編者が指摘しているように、1980年代半ばにおける歴史的社会科学（「社会構造史」）と新たに登場して確立されつつあった「日常史」との間の論争にある⁽⁵⁾。

1993年にダニエル (Ute Daniel) は、社会史の史学史的展開の中で「文化」と「社会」の位置が大きく変化していることを確認し、社会史の現状を「社会史の文化論的転回」と特徴づけた。かつて19世紀には「文化」は闘争概念にすぎず、後に、「社会」「社会的なもの」が歴史学の中核としての国家・政治に対抗する概念として、「文化」に代わって登場した。第二次世界大戦後も1960年代以降になると、社会学の「社会」概念、「歴史的社会科学」の「社会」概念を核として、「社会」概念がエスタブリッシュされることとなった。それに対して「文化」は社会経済的に根拠づけられた階

(2) Jan-Otmar Hesse/Christian Kleinschmidt/Karl Lauschke (Hrsg.): *Kulturalismus, Neue Institutionenökonomik oder Theorievielfalt. Eine Zwischenbilanz der Unternehmensgeschichte*, Essen 2002.

(3) Hisashi Yano: „Arbeitsmigration im Steinkohlenbergbau in der Frühphase der Bundesrepublik“, in: *Kulturalismus*.

(4) Hesse/Kleinschmidt/Lauschke: „Einleitung“, S.10 ff.

(5) Hesse/Kleinschmidt/Lauschke: „Einleitung“, S.9.

級状態の結果として把握されるにすぎなかった。しかしながら 20 世紀末になると、「文化」が社会に代わって核としての位置をもって登場することになった。社会的なものア・プリアリな優位が否定され、中心に位置するようになるのは、社会的主体の意味づけ・知覚パターン、人間が現実を定義する集合的意味構成の体系を総体と把握される「文化」である⁽⁶⁾。

文化主義的企業史研究の論集において筆者の労働移民に関する論文が掲載されていることの意味は、移民史研究が「新しい文化史」の一環としての歴史研究、「他なる故郷」、トランスナショナル史やグローバル化あるいはグローバル史の研究対象と共通性をもつからであろう。いかなる意味で、そしてどの程度、「新しい社会史」から「新しい文化史」への転回といえるのか、吟味する余地が残されている。筆者の研究は研究対象においてはグローバル化と異文化に関わる問題を扱っているとはいえ、歴史研究のやり方においては、新しい社会史の観点からの伝統的な実証的歴史研究である。歴史学の方法論の次元と研究対象の次元を区別することが重要であろう⁽⁷⁾。

本稿の課題は、ここで問題になっている「社会史の文化論的転回」そのものではなく、「歴史的社会科学」からこの「社会史の文化論的転回」へとシフトする過程に焦点を当て、そこで展開された議論、歴史学における方法論上ならびに歴史学の視角と構想上の争点を検討することにある。現代の歴史学上の論議の焦点となるかに思われる「文化論的転回」の問題がどこにあるのか、この問いは、どのようにして文化主義的方向が歴史学の中に登場してきたのか、歴史的視点から眺めることによって、より鮮明に理解できると考えるからである。1970 年代後半から 80 年代半ばのドイツ歴史学における議論を追跡することが本稿の主要な課題である。結論を先取りしていえば、歴史的社会科学とそのパラダイムに対抗した「日常史」・「歴史人類学的社会史」の挑戦を通して、歴史学においてどのような論議がなされたのかを検討する。「日常史」と「歴史人類学的社会史」の領域における、歴史研究の方法と観点、問題設定や研究対象に関する議論を追う。

本稿の章別構成は以下である。

I. はじめに

II. 心性史から文化史へ——アナール学派とミクロストーリー

第 1 節 心性史——1950 年代～60 年代

第 2 節 文化史への転回——1970 年代

第 3 節 ミクロストーリー——イタリア歴史学の貢献

(6) Ute Daniel: „'Kultur' und 'Gesellschaft'. Überlegungen zum Gegenstandsbereich der Sozialgeschichte“, in: *Geschichte und Gesellschaft*, 19, 1993, S.69 ff.

(7) 筆者は川越修と共に「メゾ社会史」を提起した。川越修・矢野久『明日に架ける歴史学——メゾ社会史のための対話』（ナカニシヤ出版、2016 年）[Osamu Kawagoe/Hisashi Yano: *Asu ni Kakeru Rekishigaku. Mezzo Shakaishi no Tameno Taiwa*, Nakanishiya Shuppan 2016]。

III. 「日常史」の成立と展開——1970年代後半以降のドイツ社会史

第1節 社会構造史と「日常の社会史」

第2節 「日常史」の成立

第3節 日常的生活世界——リュトケによる「勝手気儘 (Eigen-Sinn)」の概念化

第4節 コミュニケーション的「日常史」——ニートハマーとポイカート

第5節 日常史の分裂へ——リュトケとポйкаートの対立

IV. 方法としてのオーラルヒストリ

V. 歴史人類学的社会史研究

第1節 『階級と文化』(1982年)

第2節 『感情と物的利害』(1984年)

VI. ミクロ史とマクロ史との対立

第1節 ミクロ史からの挑戦

第2節 マクロ史からの反論

VII. 日常史の変容——1980年代後半以降

VIII. 結論的考察

1970年代後半からのドイツの歴史学の動向を考える上で、歴史研究の方向転換をもたらしたのはドイツ以外の欧米諸国における新しい方向性であったことが重要である。それは、大別すれば「心性史」, 「文化史」, 「ミクロストーリー」の三つのカテゴリーに集約できるであろう。そこで第II章ではフランスの歴史学の動向を振り返り、1950年代、60年代の「心性史」、70年代の「文化史」への転回を検討し、さらにイタリアの歴史学が提供した「ミクロストーリー」の議論を扱う。

その後の章では、ドイツに焦点を絞る。1970年代以降の歴史的社会科学(社会構造史)への批判は二つの歴史研究の領域で展開された。「日常史」と「歴史人類学的社会史」である。まず第III章では1970年代後半以降のドイツの社会史研究の動向を扱う。それまでの社会構造史とその延長線上の「日常の社会史」の特徴を明らかにし、これに対する批判として登場した「日常史」を考察する。「日常史」研究内部においても論争があり、日常史の多様性を明確にするために、「日常的生活世界」概念を検討し、日常史研究内部での議論そのものに迫る。第IV章では日常史の方法としての「オーラルヒストリ」を扱う。「記憶」が1980年代以降、歴史学において重要なテーマになったが、ドイツではどのような議論が展開されたのかを検討する。

第V章において、社会構造史に対する第二の批判的歴史研究としての「歴史人類学的社会史」を考察の対象とし、ここではとりわけマックス・プランク歴史研究所の1980年代の歴史研究に焦点を絞る。第VI章では1980年代半ばに行なわれたミクロ史とマクロ史の対立を扱う。ミクロ史の主張とマクロ史の側からの反論を対照させて検討する。続く第VII章では日常史自身が1980年代以降

に変化したプロセスを追跡する。

最後に第 VIII 章の結論的考察では、ドイツの歴史学の方向転換の歴史を総括し、第 II 章で明らかにしたフランス歴史学の動向と比較しながら、ドイツ歴史学の方向転換の特徴を明らかにする。

戦後（西）ドイツの歴史学においては、伝統的歴史学（歴史主義）が主流であり、その中でこうした伝統的歴史学に対する批判的な歴史学として「構造史＝社会史」が誕生した。コンツェ（Werner Conze）やブルンナー（Otto Brunner）など、すでに戦前から国家と社会の関係を独自の観点から考察するいわゆる「民族史」から出発し、その一方でフランスのアナール学派から刺激を受けつつ、社会構造の変化への政治的決定や個々の人物の意義も重視しながら比較・類型化的方法を前面に出して新しい歴史研究を打ち建てた。アナール学派との関連でいえば、長期の時間の流れにある深層の歴史に対して、この構造史＝社会史は中層的時間を核に表層的な政治史的時間の流れとの関連を追究しており、数量化に対抗し、「個性」を構造との関係で重視する歴史学であった。その意味でドイツ特有であった。これは、ドイツの歴史家がドイツ歴史学の枠内で厳密な方法論上の論議を展開したことの結果であった。⁽⁸⁾

1960年代半ば以降、以上のような構造史＝社会史を超えて、その次の世代の歴史家たちは政治史や理念史中心の伝統的な歴史学を批判し、フランスの歴史学ではなく、アメリカの近代化論の影響を受けつつ社会科学として歴史学を構築する方向へ向かった。研究対象としては主として第二帝政研究、ビスマルク研究、帝国主義研究であり、人物・政治・外交重視の政治史から経済・社会的勢力の利害考察に重点があった。「外政」に対し「内政」に優位をおき、内政においても、社会的経済的構造諸条件の組合せから生じる「過程」を重視した。「理念型」あるいは理論的な概念に基づいた経験的研究を積極的に行ない、また歴史的比較を重視し、近代化論に立脚してドイツの「特殊な道」を批判的に考察した。ドイツは経済的に近代化（＝工業化）したが、社会的・政治的に近代化せず、ナチスへの道を歩んだとして、ナチスをドイツ史の中からではなく外からの大衆民主主義によるものだとする伝統的な歴史学の見解を批判した。彼らは、自分たちの歴史学を「社会的領域の歴史」としての「社会史（Sozialgeschichte）」ではなく、「社会全体の歴史」としての「社会構造史（Gesellschaftsgeschichte）」と特徴づけ、「歴史的社会科学」として「社会科学としての歴史学」を行なおうとした。しかし実際になされた研究をみると、むしろ「政治社会史」という特徴をもった。⁽⁹⁾

(8) 矢野久「1950・60年代西ドイツ歴史学とフランス・アナール学派」『三田学会雑誌』105巻4号（2013年1月）[Hisashi Yano: „Die Geschichtswissenschaft in der BRD in der 1950er und 60er Jahren und die französischen 'Annales'“, in: *Mita Gakkai Zasshi* [*Mita Journal of Economics*], 105(4), 2013]。

(9) 矢野久「『歴史的社会科学』の成立——1960年代から70年代半ばのドイツ社会史群像」『三田学会雑誌』108巻1号（2015年4月）[Hisashi Yano: „The Development of 'Historical Social Science': German Social History from the 1960s to the mid-1970s“, in: *Mita Gakkai Zasshi* [*Mita Journal of Economics*], 108(1), 2015]。

ランスの歴史学とは異なる道を歩いたのである。⁽¹⁰⁾

II. 心性史から文化史へ——アナール学派とマイクロストーリー

第1節 心性史——1950年代～60年代

フランス「アナール学派」歴史学は、「現在」の関心から歴史を眺める「問題史」と社会全体の構造的関連をめざす「全体史」によって特徴づけられる人間科学であるとはいへ、雑誌『アナール』の当初のタイトルが示すように、研究領域の重点は「経済」と「社会」におかれ、心性は「心理的事実」とみなされ、「心性史」は「全体」史の一局面にすぎなかった。⁽¹¹⁾⁽¹²⁾

第二次世界大戦後のアナール学派第二世代においては、経済と普通の人々の生活状態に注目し、系列的・数量的方法を駆使して、社会経済的・人口的データと文化的コンテクストの関係、「人口動向」、飢餓困窮と伝染病、経済的契機と死亡率の関係を分析の対象とした。この第二世代の関心はブローデル (Fernand Braudel) の「長期持続」概念に依拠した「構造」に向けられ、「心性」も「長期の過程の監獄」とみなされた。構造史的研究は、社会のあらゆる階層を含む「全体としての人口」を対象に「長期持続」的「日常生活」を扱った。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾

1960年代にフランスの歴史学に変化が生じた。歴史学は民族学、社会学、人口学という他の学問領域と併合することによって、家族・死・性・犯罪・社会的結合・宗教的心性など自然と文化の間の境界領域をなす心性史研究が解き放たれ、「歴史家の領域」が拡大した。心性史は価値体系や集合的態度形態、集合的無意識、自明の理であるがゆえに意識されないものを扱うようになったのである。⁽¹⁵⁾

(10) Klaus Nathaus: „Sozialgeschichte und Historische Sozialwissenschaft“, Version: 1.0, in: *Docupedia-Zeitgeschichte*, 24.9.2012, URL: <http://docupedia.de/zg/>, S.1 f., 6, 8.

(11) Matthias Middell: „Die unendliche Geschichte“, in: *Alles Gewordene hat Geschichte. Die Schule der ANNALES in ihren Texten 1929–1992*, Leipzig 1994, S.8.

(12) Philippe Ariès: „Die Geschichte der Mentalitäten“, in: *Die Rückeroberung des historischen Denkens. Grundlagen der Neuen Geschichtswissenschaft*, hrsg.v. Jacques Le Goff, Roger Chartier und Jacques Revel, Frankfurt a.M. 1994, S.140 f.

(13) Ariès: „Die Geschichte der Mentalitäten“, S.142–146; Middell: “Die unendliche Geschichte“, S.14 ff. ピーター・バーク「ニュー・ヒストリー——その過去と未来」ピーター・バーク編『ニュー・ヒストリーの現在——歴史叙述の新しい展望』谷川稔他訳 (人文書院, 1996年, 原書1991年), 23頁以下 [Peter Burke: „New History“, in: *New Perspectives on Historical Writing*, ed. by Peter Burke, Cambridge 1991]。

(14) Krzysztof Pomian: „Die Geschichte der Strukturen“, in: *Die Rückeroberung des historischen Denkens*, S.167, 174.

(15) Ariès: „Die Geschichte der Mentalitäten“, S.158 f., 162 f.; Roger Chartier: „Die Welt als Repräsentation“ (1989), in: *Alles Gewordene hat Geschichte*, S.322 f. 邦訳, ロジェ・シャルルチエ「表象としての世界」ジャック・ルゴフ他『歴史・文化・表象』二宮宏之編訳 (岩波書店, 1992年), 175–177頁。

それ以降 1970 年代半ばまでには、フランス歴史学界においては新しい方法論と問題設定が確立されることになった。アナール学派第一世代よりも強い「全体史」志向をもったが、「人間」を通じて社会を全体的に捉える「構造人類学」の影響による。人類学のテーマであった食・衣服・習俗など日常的物質文化、身体、身振り、神話あるいは性が歴史研究の対象となった。「長期持続」概念がこの日常の歴史学と人類学との接近を促進した。⁽¹⁶⁾

全体性に至るためには全体を秩序立てる概念が必要となるが、新しい人類学的歴史学は、ブローデルの「長期持続」から起因する「系列の歴史学」、諸系列の間に共通するある一体性、諸構造の総体を見渡すと同時に、特定の分野の長期的「系列」分析であり、歴史を「からだ」と「ところ」の両面からその深層において捉える「深層歴史学」を特徴とする。⁽¹⁷⁾この構造的歴史学と歴史人口学とを結びつけたのがアリエス (Philippe Ariès) である。歴史人口学によって、諸構造間の相互作用を特徴づけ、社会の構造を明らかにしつつ、食・セクシュアリティ、身体・死・病気への長期に渡る態度を明らかにすることが可能となった。⁽¹⁸⁾

こうして系列的方法は心性史にも適用され、フランス歴史学は「心性史」へと転換していく。この「心性史」の特徴は、①集合的な繰り返す心性（「集合的心理」）を対象とし、その方法は系列的数量的であり、②長期的な資料（財産目録、遺言書、図書目録、裁判記録など）を優先しつつ、表層・中層・深層のブローデルの三つの時間層を相互に関連させ、③テキストと図像の中に、差異ではなく集合的無意識の表現を見出した。心性史によって歴史学は「新たな科学的正当性」を獲得し、社会諸科学と歴史学との間に緊密な同盟が結ばれた。「心性史」は歴史学の前衛的存在になったのである。⁽¹⁹⁾

(16) Jacques Le Goff: „Neue Geschichtswissenschaft“, in: *Die Rückeroberung des historischen Denkens*, S.14, 37 ff. ルゴフ「歴史学と民族学の現在」ジャック・ルゴフ他『歴史・文化・表象』二宮宏之編訳（岩波書店、1992年）、23–26頁 [Le Goff: „Histoire et ethnologie aujourd’hui“ (1976)].

(17) Le Goff: „Neue Geschichtswissenschaft“, S.39. ルゴフ「歴史学と民族学の現在」、26頁以下、30頁以下。ルゴフはビュルギエールとの討論において、歴史人類学は「長期的持続における変化の学」と特徴づけている。アンドレ・ビュルギエール「ヨーロッパ社会の研究における人類学と歴史学」(1977年) ルゴフ他『歴史・文化・表象』、146頁 [Burguière: „Anthropologie et Science historiques“ (1977)].

(18) Pomian: „Die Geschichte der Strukturen“, S.189 ff., 193.

(19) Chartier: „Die Welt als Repräsentation“, S.323. 「表象としての世界」、176–177頁。Roger Chartier: „New Cultural History“, in: *Kompass der Geschichtswissenschaft. Ein Handbuch*, hrsg.v. Joachim Eibach und Günther Lottes, Göttingen 2002, S.194 ff.; Roger Chartier: „Intellektuelle Geschichte und Geschichte der Mentalitäten“, in: *Mentalitäten-Geschichte. Zur historischen Rekonstruktion geistiger Prozesse*, hrsg.v. Ulrich Rauff, Berlin 1987, S.78 ff.; Michel Vovelle: „Serielle Geschichte oder ›case studies‹: ein wirkliches oder nur ein Schein-Dilemma?“, in: *Mentalitäten-Geschichte*, S.115 ff.; Ute Daniel: *Kompendium Kulturgeschichte. Theorien, Praxis, Schlüsselwörter*, Frankfurt a.M. 2004, S.224 ff.

第2節 文化史への転回——1970年代

しかしながら、歴史学と社会諸科学との結合はそう長くは続かなかった。構造史的・心性史的社会史研究が全盛期を迎えたと考えられる時期は、同時にそれに対する批判が提起された時期でもある。二つの方向からこれまでの歴史学のあり方に対する批判が提起された。

一つは「出来事」の復権である。「長期持続」的歴史研究自体の中から、こうした動かない不変なものへの探求に対する問題が投げかけられ、その副産物ないし裏面として、歴史における突然の変化（「突然変異」）が問われたのである。この変化への関心は、1970年代半ばに、「長期持続」ではなく、歴史的变化や「出来事」、「点としての歴史」に注目すべきであり、現代史はむしろ「可動性」にあるとして「出来事への回帰」が主張されるようになった。⁽²⁰⁾

もう一つは、イタリアの歴史学から提起された数量的な心性史に対する批判である。1970年代後半にギンズブルグ（Carlo Ginzburg）が心性の概念を次の三つの理由から拒否した。①世界像の動かない、無意識の契機のみを心性概念は強調しており、合理的意識的に表現された理念が過小評価されていること、②社会的なミリューを同じカテゴリーと観念にまとめてしまっていること、③系列的・数量的なやり方と結びついて、繰り返すものを核にすえて非常（異常）なものを軽視していることである。ギンズブルグは統計的な分布に対して個別の習得・領有を優先すべきであると主張した。個人あるいは共同体がどのように、それぞれの文化に依存しつつ、理念・信仰・テキスト・書物を解釈しているかを理解すべきというのである。つまり、ギンズブルグによれば、「心性史」においては、社会全体が同質的なものとされ、諸個人の思考と態度が心性的な構造に支配されていることが問題であった。⁽²¹⁾

心性史を内包した「社会史」から「文化史」へと歴史学の動向は大きく変化する。この転換において重要な意味をもつのは「人類学的眼差し」である。人類学的な文化史は、社会史の体系的な主要概念である「社会」を放棄し、「文化」概念に置き換えた。この転換にはアメリカの文化人類学者ギアーツ（Clifford Geertz）の「濃密な（厚い）記述（Dichte Beschreibung）」が決定的な影響を与えた。文化はコンテクストあるいは枠組みとされ、社会的事実内容は社会的関連の中で扱い、それが主体による意味づけにおいて社会的事実内容を認識するものとされた。⁽²²⁾

遅くとも1970年代にフランスでは心性史が人類学との対話を通じて歴史学の革新の核になり、新しいテーマを研究の対象としていった。これは「新しい文化史（New Cultural History）」と呼ばれ、「意味が形成される」過程、文化的実践と集合的表象へ向かう。⁽²³⁾

(20) Michel Vovelle: „Die Geschichtswissenschaft und die »longue durée«“, in: *Die Rückeroberung des historischen Denkens*, S.124–127.

(21) Chartier: „New Cultural History“, S.196.

(22) Thomas Sokoll: „Kulturanthropologie und Historische Sozialwissenschaft“, in: *Geschichte zwischen Kultur und Gesellschaft. Beiträge zur Theoriedebatte*, hrsg.v. Thomas Mergel und Thomas Welskopp, München 1997, S.234, 246 ff.

ビュルギエール (André Burguière) は 1977 年の「ヨーロッパ社会の研究における人類学と歴史学」、翌 78 年の「歴史人類学」の論文で、人類学自身の変化ならびに歴史学と人類学の「相互交流」によって、日常的現実へと歴史研究が拡大したことを確認した。歴史学をして歴史人類学へと向かわせたのは、研究対象を包括的な文脈からも研究者自身の見方からも切り離して、対象固有の内在的諸条件に根拠を求め、対象の「他者性」を回復するという観点であるとみなす⁽²⁴⁾。

こうして 1970 年代後半においては、「歴史人類学」が 50 年代以降の経済史・社会史に代わって、新しい方法と新しい問題設定をもって、歴史学の中で確たる地位を獲得し、こうして歴史学は「歴史の歩みの線的な考え」を拒否するようになった⁽²⁵⁾。

この歴史人類学的な方向転換の意味するところは、『アナル』50 周年 (1979 年) を機にビュルギエールが「過去を捉え、過去を絶えず新たに問う場合にのみ、現在の意味 (現在における意味) がある」と述べたように、これまでのアナル学派の基本的立場たる「問題史」とは相反する主張である。人類学から新しい問題が提起されているとして、事件史、政治的なものを歴史研究の対象とし、また、数量的方法と歴史学の原子化という新たな問題に直面しているとして、個々の歴史を相互に関連づけ、社会的時間の複雑性を把握するために、ビュルギエールは観点と接近方法の「多様化」を主張した⁽²⁶⁾。

この方向転換はデュビー (Georges Duby) のいう「歴史認識における座標軸の転換」である。① 経済的説明要因の後退、無償行為・贈与・象徴的儀礼の重視、系列的数量的分析ではない方法の採用、② 因果連関ではなく相互連関の強調、③ 民衆文化への注目、④ 出来事の復権である。この転換は心性史の領域では、シャルチエ (Roger Chartier) が強調するように、「第三次元の系列史」によって社会的行動主体が追放されたことが批判され、代わって主体による知的動機や文化的形態の領有を重視することが唱えられた。心性史は、文化的生産物をさまざまな知的領域の間の「関係」によって置き換え、知的決定と社会的位置の結びつきを主体の次元で構築することが重要だとみなした⁽²⁷⁾。文化的知的消費をそれ自体一つの「別の生産」と把握すべきとされ、テキストの読書行動は知的な行動と位置づけられ、こうして心性史に代わって「知的歴史」がクローズアップされて、テキストと、

(23) Middell: „Die unendliche Geschichte“, S.28 f.; Daniel: *Kompendium Kulturgeschichte*, S.227.

(24) ビュルギエール「ヨーロッパ社会の研究における人類学と歴史学」, 114 頁以下, 117 頁, 121 頁, 126 頁以下, 131 頁。

(25) André Burguière: „Historidche Anthropologie“, in: *Die Rückeroberung des historischen Denkens*, S.74, 99. 1979.

(26) André Burguière: „Die *Annales*1929–1979“ (1979), in: *Alles Gewordene hat Geschichte*, S.97, 100 ff.

(27) ジョルジュ・デュビー「歴史認識における座標軸の転換」(1982 年) ルゴフ他『歴史・文化・表象』, 3–11 頁。Chartier: „Intellektuelle Geschichte“, S.79, 83 ff.; Vovelle: „Serielle Geschichte?“, S.114, 118 f.

テキストを構成する個人的集会的読書との関係を中心におく歴史学とみなされる。このような心性史の転換の背後にあるのは、「ポストモダニズム」の影響である。心性史の対象は現実ではなく、人間が現実をどのように考えるかにおかれ、いかなるテキストも現実との関係はなく、テキストと現実との関係は、言説のモデルにしたがって構成されるものとみなされる⁽²⁸⁾。

こうしてフランス歴史学は「新しい文化史」へと方向転換する。その過程で登場する試みの一つが、1984年に始まるノラ（Pierre Nora）を中心とする「記憶の場」の研究である。ノラの問題提起は、歴史的事実とその表象をめぐる議論が言説分析的心性史へと展開する方向へ向かっており、90年代には「記憶の文化＝社会史」へと至ることになる⁽²⁹⁾。

「新しい文化史」の特徴は、ビュルギエールによれば、歴史的現実をディスクールの総体と同一視し、歴史学的認識とは「表象」の歴史だと考え、過去の行動を、行動者自身がそれらの行動に与えていた意味とともに捉える「新しい歴史学」を意味する。そこにみられるのはテーマと方法論双方での新しさ、社会科学と社会的なものの概念の動揺であり、ルゴフ（Jacques Le Goff）は出来事の復帰、自叙伝の復帰、物語的歴史叙述の復帰、政治的歴史学の復帰を語る⁽³⁰⁾。1989年、雑誌『アナル』60周年を機に、編集部は、現実の多様性のための複雑な歴史的モデルを必要とし、記憶・学習・不確実・交渉を社会的出来事に導く分析的戦略に向かおうとした⁽³¹⁾。

シャルチエも同年、「主体の哲学への回帰」と「政治の復帰」を求めて、「歴史認識の枠組みそのものを再考する」ことを要請した。シャルチエの研究に即していえば、リアルなものとしてきた社会的なものそこから導かれた表象というこれまでの考えに対抗する「文化史」である。政治的・社会的・言説的な実践の歴史的産物とみなされる社会的世界、この社会的世界の構造に関する表象の営みを研究するものである⁽³²⁾。

この「新しい文化史」の成立においては、ギアーツに代表される解釈人類学がテキストとコンテクストの区別、文化形式の領有における差異を消し去ったとして批判し、「差異」へと向かった人類

(28) Chartier: „Intellektuelle Geschichte“, S.89–92.

(29) 谷川稔「社会史の万華鏡——『記憶の場』の読み方・読まれ方——」『思想』No.911（2000年5月号）[Minoru Tanigawa: „Shakaishi no Mangekyô“, in: *Shisô*, 911, 2000], 同「『記憶の場』の彼方に——日本語版序文にかえて」ノラ編『記憶の場——フランス国民意識の文化＝社会史』（1）谷川稔他監訳（岩波書店、2002年）所収 [Minoru Tanigawa: „'Kioku no Ba' no Kanata ni“, in *Kioku no Ba*, (1), Iwanami Shoten, 2002], ピエール・ノラ「記憶と歴史のはざまに」（1984年）、同「『記憶の場』から『記憶の領域』へ——英語版序文」（1996年）ノラ編『記憶の場——フランス国民意識の文化＝社会史』（1）谷川稔他監訳（岩波書店、2002年）所収 [Pierre Nora: „Entre Mémoire et Histoire: La problématique des lieux“, „From *Lieux de mémoire* to *Realms of Memory*“, in: *Kioku no Ba*, (1), Iwanami Shoten 2002]。

(30) ビュルギエール「社会科学の危機と歴史学」, 39, 45頁。Jacques Le Goff: „Vorwort 1988“, in: *Die Rückeroberung des historischen Denkens*, S.8 f.

(31) „Wagen wir den Versuch“ (1989), in: *Alles Gewordene hat Geschichte*, S.109 f., 113, 117; Middell: „Die unendliche Geschichte“, S.26.

学自体における方向転換が関連する。「新しい文化史」は、歴史を秩序づける物語と位置づけられることになる。⁽³³⁾

1970年代の後半以降、「長期持続」、経済の優位、数量的分析の客観性が拒否され、代わって、個人と文化的表象の研究を優位におく主体の歴史研究が前面に登場し、新しいパラダイムが謳われた。「新しい文化史」の特徴は、第一に、経済・社会史による数量的方法、「長期持続」の構想は、現在の前提を過去に投影しているの袋小路に入ってしまったとし、第二に、現実にはテキストと言語の本性をもつという考えに立脚して、経験ではなく言語を研究の対象にすべきだとして社会史を批判し、第三に、歴史的眞実と客観性の問題に関連して、歴史的言説とフィクションの言説の間にはいかなる区別もないと主張している点にある。⁽³⁴⁾

現実には言語ないしテキストによって書かれているという考えに立脚して、実証主義的歴史学だけでなく社会科学的な社会史も否定された。このように、歴史学における「新しい文化史」への転換においては、「言語論的転回」と「ポストモダニズム」の考えが影響を及ぼしていることが確認できよう。言語によって構成された「現実 (Realität)」概念、物語としての歴史叙述、テキストとコンテキストの関係から、普遍化への可能性は排除され、現実性の「客観的」研究が不可能になったとみなされた。⁽³⁵⁾

第3節 ミクロストーリー——イタリア歴史学の貢献

『アナル』創刊60周年を控えた1988年、雑誌編集部は、支配的なパラダイムとその核をなす「社会的なもの」の概念そのものの正当性が失われ、「不確実性の時代」が到来したとみなし、「革新的な」歴史研究のための新しい方法として「分析の基準」と「歴史を叙述する仕方 (エクリチュール)」を前面に出した。分析の基準として編集部は「ミクロストーリー (ミクロ史)」を挙げている。⁽³⁶⁾ このことは何を意味しているのだろうか。

(32) Chartier: „Die Welt als Repräsentation“, S.323 ff. 「表象としての世界」, 176–179頁。Roger Chartier: „Einleitung: Kulturgeschichte zwischen Repräsentationen und Praktiken“, in: *Die unvollendete Vergangenheit. Geschichte und die Macht der Weltauslegung*, Frankfurt a.M. 1992 (1989¹), S.12 f., 17 f., 20 ff.

(33) Chartier: „New Cultural History“, S.193, 197 ff, 203 ff. リン・ハント「歴史・文化・テキスト」リン・ハント編『文化の新しい歴史学』筒井清忠訳 (岩波書店, 1993年), 8頁, 14頁以下 [Lynn Hunt: „Rekishi, Bunka, Tekusuto“, in: *Bunka no Atarashii Rekishigaku*, Iwanami Shoten, 1993]。Lynn Hunt: „Geschichte jenseits von Gesellschaftstheorie“ (1990), in: *Geschichte schreiben in der Postmoderne. Beiträge zur aktuellen Diskussion*, hrsg.v. Christoph Conrad und Martina Kessel, Stuttgart 1994, S.100, 103, 106, 109 f., 113.

(34) Gérard Noiriel: „Die Wiederkehr der Narrativität“, in: *Kompass der Geschichtswissenschaft*, S.356, 366.

(35) Noiriel: „Die Wiederkehr der Narrativität“, S.363 ff.; Christoph Conrad/Martina Kessel: „Geschichte ohne Zentrum“, in: *Geschichte schreiben in der Postmoderne*, S.11 ff., 15, 19 f.

これまで検討してきたように、心性史の関心は集合的無意識から歴史における個々の人間の態度に、問題設定は表象世界とその世界像に移った。政治・経済・社会の歴史的变化が個々の人間によってどのように理解され、加工されたのか、個人的集合的な意義づけと価値が明らかにされるようになった。⁽³⁷⁾

マクロ的数量的な構造的機能主義モデルに依拠する歴史学は1973年刊行のブローデル記念論文集が示すように、70年代半ばに全盛時代を迎えたと同時に、このブローデル・パラダイムの喪失をも意味した。ル＝ロワ＝ラデュリ (Emmanuel Le Roy Ladurie) の『モンタイユ』(1975年)が成功裡に刊行され、『アナール』誌上では価格史に関する研究論文は一気に減少し、家族・身体・ジェンダー関係・年齢・政党・カリスマ的現象などのテーマが溢れるようになった。⁽³⁸⁾ フランスの歴史学は系列的心性史を経て「言語論的転回」を軸にポストモダニズムの方向へ向かい、「新しい文化史」へと大きく舵を切った。

それに対してイタリアの歴史学は別の道を歩むこととなった。ギンズブルグ自身が1993年に回顧しているように、「ミクロストーリー (ミクロ史) (Mikro-Historie)」という用語が現在の意味での「ミクロ史」につながるの、レーヴィ (Giovanni Levi) による。これは、ブローデルや『アナール』に結集する歴史家たちのマクロ的数量的モデルに対する不満と批判から生じた。⁽³⁹⁾

ギンズブルグによれば、彼自身が1960年代から70年代にかけて徐々に、人類学的研究の歴史学的・概念的・叙述的含意を理解するようになり、『チーズとうじ虫』(1976年)の公刊が示すように系列の歴史叙述ではなく、その反対、つまり、「視点を接近」させて、狭く限定された史料の研究、未知の人物に結びついた史料の研究に到達した。⁽⁴⁰⁾

痕跡と史料しかもたない「ミクロストーリー」はその限界を受け入れ、その認識論的意味を探る。ギンズブルグは、史料という事実とそれが語るものとを区別すべきであり、行動する人間と語る人間を別の事実として区別し、事実そのものの存在として記憶の問題に立ち向かう。ポストモダニズムとは異なる道を示したのである。⁽⁴¹⁾

(36) „Geschichte und Sozialwissenschaften. Eine kritische Wende?“ (1988), in: *Alles Gewordene hat Geschichte*, S.104–107. 邦訳「アピール歴史と社会科学——危機的な曲がり角か？」ルゴフ他『歴史・文化・表象』, 165–169頁。シャルチエは『アナール』が「社会科学の全般的危機」の存在を確認しつつ、他方で、全般的危機を歴史学に対しては全面的には適用せず、歴史学の対象と方法に分析技法と認識枠組を与えてきた地理学、民族学、社会学など隣接諸科学が危機にあるという。Chartier: „Die Welt als Repräsentation“, S.320. シャルチエ「表象としての世界」, 173頁。

(37) Winfried Schulze: „Einleitung“, in: *Sozialgeschichte, Alltagsgeschichte, Mikro-Historie. Eine Diskussion*, hrsg.v. Winfried Schulze, Göttingen 1994, S.9.

(38) Carlo Ginzburg: „Mikro-Historie. Zwei oder drei Dinge, die ich von ihr weiß“, in: *Historische Anthropologie*, 1, 1993, S.176 ff. 邦訳「ミクロストリアとはなにか——私の知っている二、三のこと——」『思想』No.826 (1993年4月号), 10頁以下。

(39) Ginzburg: „Mikro-Historie“, S.169–175, 179 f. 「ミクロストリア」, 4–6頁, 12頁。

(40) Ginzburg: „Mikro-Historie“, S.180 f. 「ミクロストリア」, 13頁。

後述するようにレーヴィとならんでギンズブルグは歴史研究に固有の構築的契機を強調していたが、歴史学をテキスト的次元に縮小し、あらゆる認識的価値を奪う相対主義に対抗して論戦を展開した。ポストモダニズムを拒否し、認識論的に挑戦したところに、イタリアのマイクロストーリーの特徴がある⁽⁴²⁾。

第一に、「マイクロストーリー」は比較の問題を類似（アナロジー）ではなく異例な事例を通じて行かない（Außerordentliche Normale「通常の例外」概念で）、第二に、あらゆる社会的地位は無数の個人的戦略の相互作用の結果であり、この相互作用の絡み合いは「視線を接近させる」ことでのみ再構成可能になるとみなす。このマイクロストーリーの次元とより広い文脈の次元の関係、顕微鏡的見方と望遠鏡的見方の「異質性」こそが、マイクロストーリーの最大の困難さと最大の潜在的豊かさを同時に形作っているとギンズブルグは主張する⁽⁴³⁾。

レーヴィはギアーツの「濃密な記述」が「文脈」の中での事実の解釈を提供し、ギアーツの文化概念が「意味を表示するものの網の目」から成り立ち、その網の目の分析が「意味を追求する解釈的科学」であることを確認した上で、ギアーツの解釈人類学が記号や象徴に同質的な意味を見出すことを批判する。マイクロストーリーは、それらが生み出す「社会的表象の多様性との関連」において定義し測定するものであり、「象徴的構造」は社会的条件という文脈の中では、表象の断片化され細分化された多様性を生み出すがゆえに、研究の対象とすべきだと主張する⁽⁴⁴⁾。

叙述に関してはマイクロストーリーは、現実を客観的なものとみるのではなく、研究者の視角が説明の内在的な一部であること、その一方で、一般化や数量的定式化に対抗して、個人の行動の自由との関係において事実の説明を行なうとする。マイクロストーリーは、糸口・記号・兆候、つまり「特殊なもの」から出発して「その意味をそれ自体の特殊な文脈に照らして確定」し、過去の認識に至る。「機能主義が社会的な首尾一貫性を強調するのとは対照的に」、マイクロストーリーは規範的システムの矛盾、「観点の断片化、矛盾、複数性」に注目し、「きわめて微細で局所的な行動」を際立たせる⁽⁴⁵⁾。

数量化を重視する社会史に対して、マイクロストーリーは「数学の非数量的部門」に接近し、定式化された精密化を拒否することなく「不確定性の分野」を拓けようとしており、スケールの縮小、特殊なものの役割、受容と叙述への注意、文脈の特殊な定義、相対主義の拒否といったものを重視しているとして、レーヴィは、マイクロストーリーが単純化、二元論的仮説、二極分解、厳密な類型論、典型的な特徴の追求といったものを拒否する分析の枠組みを提示したと主張する⁽⁴⁶⁾。

(41) Ginzburg: „Mikro-Historie“, S.187 ff. 「マイクロストーリー」, 18 頁以下。

(42) Ginzburg: „Mikro-Historie“, S.190. 「マイクロストーリー」, 20 頁。Schulze: „Einleitung“, S.10 f.

(43) Ginzburg: „Mikro-Historie“, S.191. 「マイクロストーリー」, 21 頁。

(44) ジョヴァンニ・レーヴィ「マイクロストーリー」パーク編『ニュー・ヒストリーの現在』, 114 頁以下, 120 頁以下。

(45) レーヴィ「マイクロストーリー」, 123 頁以下。

このように「ミクロストーリー」は、繰り返し、長期持続するものを系列的数量的に把握する歴史研究に対抗する。個別の出来事とそれに参加する人々の行動の再構成によって歴史現象を再構成しようとする。これまで無視されてきた諸個人、とりわけ社会下層と彼らの主体的な知覚、意味づけ、加工、解釈のし直し、行動、大きな発展への反応に関心をもつ。とはいえ、異化、痕跡、観点という点でギンズブルグは実証主義的な事実信仰と一線を画す。ミクロストーリーの研究対象の縮小自体の目的は新しい分析方法、別の視覚からの歴史学の構築にある。ミクロストーリーは一定の個性（個人）のデータに関心を寄せ、個性（個人）が把握される社会的関係の網の表象を顕微鏡によって探し求める。したがって「小さなものの歴史」ではなく「小さなところでの歴史」である。⁽⁴⁷⁾

すでに述べたように、フランスの歴史学の展開において、心性史が構造人類学の影響において成立し、その後、文化人類学の影響のもとで心性史が批判され、心性史自身が変容をみせた。その延長線上で生じた「新しい文化史」への方向転換において確認できるのは、ミクロストーリーの受容である。「新しい文化史」の成立において注目すべき点は、一方において構造人類学から文化人類学への人類学自身の転換が重要な意味をもったと同時に、他方においてギアーツの受容に示されたように、文化人類学に依拠しつつ批判的に超克したということである。文化人類学とのこの二律背反的な関係はミクロストーリーにおいても確認できるのであり、歴史研究の文化史的転回において大きな役割を果たしたのである。

III. 「日常史」の成立と展開——1970年代後半以降のドイツ社会史

第1節 社会構造史と「日常の社会史」

(西) ドイツでは歴史学の動向はどのようなものであったのだろうか。ドイツでは、伝統的歴史学（政治史）に対抗する歴史学の潮流は歴史的社会科学（社会構造史）として展開していた。社会構造史は部分領域ではなく、「社会全体」の歴史、歴史の全体性を模索する社会科学を意図していた。

モムゼン（Wolfgang J. Mommsen）は、1980年代に入って開催された日本での講演で、この「社会構造史」の立場から、「新保守主義的な」歴史学と「歴史認識の理論的基礎に関する基本的相違が今後とも存続」し、ドイツの歴史学内部の戦線は「もっと未決定」だとみていた。⁽⁴⁸⁾

しかしながら、1970年代後半のドイツ歴史学界における研究状況は、モムゼンが指摘するような、

(46) レーヴィ「ミクロストーリー」、128頁以下。

(47) Otto Ulbricht: „Mikrogeschichte: Versuch einer Vorstellung“, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, 45, 1994, S. 352 ff., 355 f.; Daniel: *Kompendium Kulturgeschichte*, S.289 ff.

(48) ヴォルフガング・J・モムゼン「西ドイツにおける歴史叙述の現在の諸傾向」中村幹雄訳『思想』No.679（1981年1月号）、125頁以下[Wolfgang J. Mommsen: „Nishidoitsu ni okeru Rekishi Jojutsu no Genzai no Shokeikô“, in: *Shisô*, 679, 1981]。

政治史と社会構造史との間の単純な対立ではなく、歴史研究の展望、問題意識、方法に関する議論は多様となっていた。とりわけ社会構造史に対する批判は鋭く、歴史学をめぐる対立は先鋭化していた。

コンツェは1977年に、ドイツの歴史学の現況について政治史か社会経済史かの二者択一ではなく、文化的社会的構造と人間の態度の双方において、歴史学は人間世界全体に対置しているとみなし、方法論に関する議論が盛んであるとはいえ、歴史的・哲学的理論と歴史的・経験的研究の相互浸透が実践の未解決の問題であるという認識を表明していた。⁽⁴⁹⁾

歴史研究の現状でいえば、コンツェを中心とする「近代社会史研究グループ」は、1970年代後半には、抽象的な社会変化のモデル構築に重点があり、社会的不平等と社会的闘争の社会史的研究には関心は薄く、労働者の生活諸条件、社会的出自、家族構造などの静的な社会学的社会史研究に取り組んでいた。⁽⁵⁰⁾

一方、機能的・構造的手法に依拠する社会構造史の側では、研究対象は徐々にナチ期に移行し、ナチ体制の権力構造、政策決定メカニズムを扱うようになっていた。総じて、社会構造史は、外交ないし国際関係に対して社会内部の構造的分析に優位をおいていたが、「政治社会史」的特徴をもっていた。とはいえ実際の社会構造史的研究は、徐々に政治社会史から離れ、社会的不平等、社会階層、階級形成などのテーマへ向かい、「社会」から出発して、経済、集団の社会状態、政治的支配、文化の間の関連の統合的な叙述と意義づけに努めた。「部門領域の社会史」から離れて「全体史」へ向かうようになったのである。⁽⁵¹⁾

社会構造史はその一方で、1970年代後半に「歴史的比較」へ向かった。コッカ (Jürgen Kocka) は両大戦間期におけるドイツとアメリカの職員層の比較史を行ない、近代西欧の正常な道に対して「ドイツ特有の道」を対置させる質的な比較社会経済史をめざした。ドイツの前工業的・前資本主義的・前市民的・官僚的な伝統がドイツ工業社会の社会構造と対立を刻印づけたとする。この比較社会史の主要な関心は、人間と労働に関係し、階級に特殊な生活・文化・所有関係を規制する政治に

(49) Werner Conze: „Die deutsche Geschichtswissenschaft seit 1945. Bedingungen und Ergebnisse“, in: *Historische Zeitschrift*, Bd.225, 1977, S.22, 25.

(50) Heilwig Schomerus: *Die Arbeiter der Maschinenfabrik Esslingen. Forschungen zur Lage der Arbeiterschaft im 19. Jahrhundert*, Stuttgart 1977; Peter Borscheid: *Textilarbeiterschaft in der Industrialisierung*, Stuttgart 1978; Werner Conze/Ulrich Engelhardt (Hrsg.): *Arbeiter im Industrialisierungsprozess*, Stuttgart 1979; Richard J. Evans (ed.): *Rethinking German history. Nineteenth-century Germany and the origins of the Third Reich*, London 1987. R.J. エヴァンズ「西ドイツ歴史学と『下から』の社会史」(1987年)『イギリス社会史派のドイツ史論』望田幸男他訳(晃洋書房、1992年)、82頁。

(51) Josef Mooser: „Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Historische Sozialwissenschaft, Gesellschaftsgeschichte“, in: *Geschichte. Ein Grundkurs*, hrsg.v. Hans-Jürgen Goertz, Reinbek bei Hamburg 1998, S.531 f.

⁽⁵²⁾
あった。

1970年代半ばは、とりわけアメリカの歴史家による数量的方法に関する議論が頂点に達していた時代である。歴史的社会科学を唱える社会構造史がこの時期に「歴史的比較」へと向かったということは、その関心が歴史学の方法として数量化を議論の対象としたのではなく、歴史的な事実の選択と解釈、社会科学における経験に関する議論の方に重点をおいていたことを示すものである。こうした学問状況に対して理論を重視し、理論から出発する歴史的社会研究を唱える動きも出てきた。1975年に創設された社団法人「数量 (Quantum)」は数量的「歴史的社会研究 (Historische Sozialforschung)」をめざしたが、「社会研究」から想起されるような歴史研究ではなく、理論から出発し方法論としての数量化に議論を集中させるものであった。歴史研究のあり方に関して新たな問題提起を提供することはなかった。社会構造史はこの数量化中心の「歴史的社会研究」には距離をおき、数量化に特化した社会科学的・分析的歴史研究よりはむしろ歴史的・解釈学的方法に重点をおいた。⁽⁵³⁾

とはいえ社会構造史は歴史学・社会学・政治学・経済学を統合する上位の学問になることはなく、60年代と比較すると「全体史」への志向を強くもったとはいえ、社会構造史の延長線で従来のな政治的社会史研究を展開していたのである。⁽⁵⁴⁾

1970年代後半における狭義の社会史研究では、近代工業社会の社会集団や階級に関する社会学的社会史研究が大きな役割を果たし、ジェンダーの問題提起、社会的行動や態度、社会的経験や知覚がより重要視されるようになった。⁽⁵⁵⁾ こうした社会史研究の一環として「日常の社会史 (Sozialgeschichte des Alltags)」研究が1970年代後半に行なわれるようになった。当時、ボーフム大学の社会経済史に所属していたロイレケ (Jürgen Reulecke) ・ヴェーバー (Wolfgang Weber) 編『工場・家族・終業後の余暇』(1978年)を一例として挙げておこう。

当時ほとんど歴史研究の対象とされていなかった「日常生活」に注目したのは、歴史学がそれま

(52) Jürgen Kocka: *Angestellte zwischen Faschismus und Demokratie. Zur politischen Sozialgeschichte der Angestellten: USA 1890–1940 im internationalen Vergleich*, Göttingen 1977; Hannes Siegrist: „Perspektiven der vergleichenden Geschichtswissenschaft. Gesellschaft, Kultur und Raum“, in: *Vergleich und Transfer. Komparatistik in den Sozial-, Geschichts- und Kulturwissenschaften*, hrsg.v. Hartmut Kaelble und Jürgen Schriewer, Frankfurt a.M./New York 2003, S.308 ff.

(53) 社団法人「数量」Quantumの正式名称は Arbeitsgemeinschaft für Quantifizierung und Methoden in der historisch-sozialwissenschaftlichen Forschung Quantum e.V. である。雑誌 *Quantum Information*, 1979年以降は *Historical Social Research/Historische Sozialforschung: Quantum Information* を参照。歴史的社会研究に関しては Heinrich Best/Wilhelm Heinz Schröder: „Quantitative historische Sozialforschung“, in: *Historische Methode*, hrsg.v. Schristian Meier und Jörn Rüsen, München 1988.

(54) Paul Nolte: „Historische Sozialwissenschaft“, in: *Kompass der Geschichtswissenschaft*, S.62.

(55) Nolte: „Historische Sozialwissenschaft“, S.64.

で、歴史形成力を個々の卓越した人物の思想と行動に見出すか、あるいは匿名の「法則的な」過程に見出していたからであった。それに対して、「普通の人々」あるいは「通常の消費者」を扱うことを主張するようになった。この「日常の社会史」は後述する「日常史 (Alltagsgeschichte)」とは異なる歴史研究であり、いわば社会構造史と「日常史」の狭間にあるといえよう。日常の社会史研究の背景として、①文化史的な研究を行なうラント史、歴史的な問題設定に接近する民俗学、②フランス・アナル学派の「歴史人類学」、③労働運動を担う人々の生活諸条件と日常的思考と行動を扱う労働運動史、④集団に特殊な心性、選択、消費態度様式の生成と関連させて日常的態度を考察する歴史的社会科学が挙げられる。「日常の社会史」への方向転換によって、多様な近代工業社会における人間の生活の特徴と態度様式、中心的な欲求構造と基礎的諸局面の理解に貢献できるという確信がある。編者のロイレケとヴェーバーはこの構想をコンツェから引き出している。⁽⁵⁶⁾

本書は、狭義の工業化局面（19世紀半ばからヴァイマル期）におけるライン・ヴェストファーレン工業地帯に限定して、「工場」「家族」「終業後の余暇」「サブカルチャー」を扱う。「工業化」は、古い伝統と諸力によって刻印された多様で矛盾した過程であり、長い学習過程を通して人々は、連帯的な行動において自己意識的に社会的衝突を闘い抜くことが可能となり、「近代的文明の成果」に参加できた⁽⁵⁷⁾と評価する。

「日常の社会史」の一環として、『余暇の社会史』（1980年）⁽⁵⁸⁾も社会構造史と日常史の狭間の過渡的な研究として注目に値する。

第2節 「日常史」の成立

1970年代には、在野の歴史研究者による歴史的日常の地域的な研究も多く公刊されるようになった。⁽⁵⁹⁾工業労働者の食や居住に関する研究が行なわれるようになったが、これまでの重点の補完とみなされる。日常の反抗性、全社会的な経済の日常的再生産との相互作用、資本主義化と支配の経験としての居住などはテーマ化されなかった。⁽⁶⁰⁾他方で、主体の自立性に関わる日常的現実を解明することは学問の世界で最初から排除されていたわけではない。1970年代後半以降、日常的犯罪性、女

(56) Jürgen Reulecke/Wolfgang Weber: „Vorwort“ zu *Fabrik-Familie-Feierabend. Beiträge zur Sozialgeschichte des Alltags im Industriezeitalter*, Wuppertal 1978, S.7 f.

(57) Reulecke/Weber: „Vorwort“, S.10.

(58) Gerhard Huck (Hrsg.): *Sozialgeschichte der Freizeit. Untersuchungen zum Wandel der Alltagskultur in Deutschland*, Wuppertal 1980.

(59) Alf Lüdtke: „Rekonstruktion von Alltagswirklichkeit–Entpolitisierung der Sozialgeschichte?“, in: *Klassen und Kultur. Sozialanthropologische Perspektiven in der Geschichtsschreibung*, Frankfurt a.M. 1982, S.332.

(60) Conze/Engelhardt (Hrsg.): *Arbeiter im Industrialisierungsprozeß*; dies. (Hrsg.): *Arbeiterexistenz im 19. Jahrhundert*, Stuttgart 1981; Klaus Tenfelde: „Neue Forschungen zur Geschichte der Arbeiterschaft“, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, 20, 1980.

性労働などの歴史研究がなされ、後述する『1930–1960年のルール地方における生活史と社会文化』のプロジェクトも立ち上がるなどして、既成の歴史学界内部でも行なわれてはいた。⁽⁶¹⁾

1977年にゲッティンゲンのマックス・プランク歴史学研究所のリュトケ (Alf Lüdtke) とメディック (Hans Medick) が共同で論文草稿を完成していた。これは、当時の彼らの歴史学的認識を示すものとして重要である。

彼らは、社会構造史がとくに英米の社会科学の理論的構想を体系的に導入したところで成り立ち、社会構造史にとって「史料の問題提起」は外的なものにすぎないとして批判する。社会構造史は「暗黙の客観主義の落とし穴」に陥っているため、「客観的構造、社会的経験、社会的行動」の複雑な関連を適切には分析できない、とリュトケとメディックは主張する。⁽⁶²⁾

リュトケとメディックによる社会構造史批判の論点は以下の三つの点に集約される。

第一に、社会構造史は近代化論という歴史過程の「一次的」見方に囚われ、18世紀から19世紀末までの時代に固定しており、ヨーロッパ中心主義であり、また、歴史的变化の「同時的」かつ「非同時的」矛盾の「複雑な交差」が考察の周辺にとどまっていると批判する。つまり、近代化論とヨーロッパ中心主義的偏見の批判が彼らの主張の一つである。⁽⁶³⁾

第二に、「階級は社会的関係であり、モノではない」(トムスン (Edward P. Thompson)) という認識が社会構造史には欠落し、社会的関係の「社会・文化的再生産の領域」が無視されていると批判する。リュトケとメディックはエヴァンズ＝プリチャード (Edwards Evans-Prichard) の社会人類学に注目し、「日常生活」の研究、祭り・抗議・遊びなどを研究対象として扱い、思考・意識内容とその形態を「無意識の思考・知覚・行動図式」との関連におくことを主張する。⁽⁶⁴⁾

第三に、社会構造史は「行動のコンフリクト」と体制との関連を解明するというものの、その関連の仕方については説明していないと批判する。国家の政治への人々の同意形成の仕方が社会構造史には看過されており、それに対してリュトケとメディックは「日常生活」、生産と再生産の関連を解明し、「日常生活」の再構築としての歴史的な想起が有効だとする。⁽⁶⁵⁾

リュトケとメディックの批判は、歴史的研究・認識・叙述過程にとっての社会科学的理論とモデ

(61) Lüdtke: „Rekonstruktion von Alltagswirklichkeit“, S.333.

(62) Alf Lüdtke/Hans Medick: „Geschichte – für wen? Grenzen und Notwendigkeit des Reformismus in der westdeutschen Geschichtswissenschaft“, in: *Alltag, Erfahrung, Eigensinn. Historisch-anthropologische Erkundungen*, hrsg.v. Belinda Davis, Thomas Lindenberger und Michael Wildt, Frankfurt am.M./New York 2008, S.46 f.

(63) Lüdtke/Medick: „Geschichte – für wen?“, S.49 f.; Hans Medick: „>Geschichte – für wen?< Zu einem anstößigen Text von Alf Lüdtke und Hans Medick aus dem Jahr 1977“, in: *Alltag, Erfahrung, Eigensinn*, S.35.

(64) Lüdtke/Medick: „Geschichte – für wen?“, S.50 ff.; Medick: „>Geschichte – für wen?<“, S.35.

(65) Lüdtke/Medick: „Geschichte – für wen?“, S.54 f., 57 ff.; Medick: „>Geschichte – für wen?<“, S.35.

ルに向かう。理論とモデルの道具的な利用は、歴史的・問題設定と叙述様式の特異性、歴史的対象と過程の複雑性と多層性の解明には適切ではなく、客観的な構造、社会的経験、社会的行動の間の複雑な関係を分析しえない。「社会的経験と社会的行動」の解明のために、当時のリュトケとメディックは、フランスのマルクス主義的構造主義とイギリスの社会人類学、さらに客観主義の危険性を回避しようとして「実践の」物的な行動「理論」(ブルデュー (Pierre Bourdieu)) に向かった。⁽⁶⁶⁾

とはいえ、以上の1977年時点におけるリュトケとメディックの見解はメディック自身が2008年に認めているように、社会構造史と同じ次元に立脚していた。その後になって、これまでとは質を異にする新たな対立が社会構造史との間で生じた。「社会史の分裂」とでもいいうる対立である。社会構造史に対抗する社会史内部の潮流として、「日常史」と「歴史人類学的社会史」の二つが挙げられる。

後者に関しては第V章で扱い、本章では「日常史」を扱う。「日常史」はドイツの歴史学においてのみ使われている術語であり、「下からの歴史」の一つである。「日常的社会史」があくまでも社会史の枠組みの範囲内で社会史の拡大をはかろうとしたのに対し、日常史は社会構造史の近代化・工業化・民主化概念を批判し、日常性、繰り返されるものを考察の前面におく。「普通の人々」の実践、歴史的・社会的過程の中でも地域と現場に注目する。後に述べる「マイクロストーリー (マイクロ史)」と必ずしも同じではないとはいえ、「小さな歴史」「マイクロ」の生活世界における主体的経験と知覚・行動を明らかにする。考察の対象時期は19世紀末以降の現代史に集中している。これは史料(文書史料)とならんでオーラル・エヴィデンスや自伝的研究を歴史研究の重要な手段とみなしていることと関連する。

(西) ドイツにおいては、東ドイツとは異なり人民 (Volk) 概念の伝統がなく、また1960年代後半の学生運動を中心とする議会外反対派はエリートの発想が根強く、民衆に対して不信感をもっていたため、人々の経験史的研究はなかなか開始されず、その一方で、欧米の研究が遅く導入され、その分集中的に受容されたため、主体的な経験に対する渴望が強かった。オーラル・エヴィデンスや自伝的叙述をはじめとした経験史的な日常史研究が、歴史における人間主体の形成力の確認の場となった。⁽⁶⁷⁾

日常史とならんで「経験史」という表現も使われていたが、1970年代後半のドイツにおいて歴史学には活気がみなぎっていた。当時のドイツの政治的社会的状況が大いに関係しえたといえよう。現実的危機、西欧・世界経済の「成長機構」の麻痺などの問題が表面化し、近代化と進歩の限界が指摘され、近代化論が批判され、環境保全運動が展開していた。のみならず歴史学の関心は人々の個人的・集合的運命におかれるようになった。労働者、「普通の人々」、社会下層民の日常を具体的かつ詳細に把握する「日常史」はこうした政治社会的環境から生じたのである。⁽⁶⁸⁾

(66) Lütke/Medick: „Geschichte – für wen?“, S.48; Medick: „>Geschichte – für wen?<“, S.33.

第3節 日常的生活世界——リュトケによる「勝手気儘 (Eigen-Sinn)」の概念化

このように、社会構造史に代わる歴史研究の新たな視角として注目されたのが「日常的生活世界」である。当時は「生活世界」「日常生活」「日常の現実」などさまざまに表現されていた。

リュトケは1978年の論文で、工場でのプロレタリア意識の条件を解明するために、社会的関係とその象徴的形態を「顕微鏡的」に把握する「日常の現実」概念を提起した。イギリスのトムスンに依拠して人々の「日常生活」と「生活様式」に注目した。ただしトムスンとは異なり、プロレタリア内部での不平等に依拠した異なる欲求表現や行動、あるいは発揮されなかった欲求の痕跡を探し求めている。リュトケは生産様式と生活様式の「同時的」・「非同時的」変化が重要であるとして、家内工業的農業生産者と工場の生産者と彼らの意味的・経験的意識の差異の考察に向かう⁽⁶⁹⁾。

19世紀後半から20世紀にかけての工場労働時間をめぐる労使の対立を検討した1980年の論文では、リュトケは統制と監視の強化とともに、公的な休憩以外の「自由な空間」の存在に注目する。労働者相互のコミュニケーションとして休憩は労働者にとって再生産の活動であると同時に、集団形成を確立・更新させるものであった。リュトケは労働時間内での多様な「濃密な」交流に注目し、工場側の労働要求からの積極的な離脱行為として位置づけ、非合法の休憩時間を非合法の自由時間とみなした。意図的なサボタージュと「内面性」への私的な撤退（独自の仕方での自分のための時間の確保）の両面を結論づける⁽⁷⁰⁾。

(67) Karin Hartewig: „'Wer sich in Gefahr begibt, kommt (nicht) darin um', sondern macht eine Erfahrung! Erfahrungsgeschichte als Beitrag zu einer historischen Sozialwissenschaft der Interpretation“, in: *Alltagskultur, Subjektivität und Geschichte. Zur Theorie und Praxis von Alltagsgeschichte*, hrsg.v. Berliner Geschichtswissenschaft, Münster 1994, S.115. 68年世代の問題として Dagmar Herzog: *Sex after Fascism*, Princeton 2005. ダグマー・ヘルツォーク『セックスとナチズムの記憶——20世紀ドイツにおける性の政治化』川越修・田野大輔・荻野美穂訳（岩波書店、2012年）参照。これらの社会史内部で成立した歴史的社会科学批判は、歴史研究者の年齢をみると、世代の問題というよりは政治的・文化的思考の違いから起因する。社会構造史のヴェーラーは1931年、コッカは41年生まれで、一方メディックは39年生まれ、リュトケは43年生まれ、後に述べる日常史の中心人物の一人であるニートハマー（Lutz Niethammer）は39年生まれである。Stefan Jordan: *Theorien und Methoden der Geschichtswissenschaft. Orientierung Geschichte*, Paderborn 2009, S.152.

(68) Hans-Ulrich Wehler: „Alltagsgeschichte. Königsweg zu neuen Ufern oder Irrgarten der Illusionen?“, in: *Geschichte von unten – Geschichte von innen*, Fernuniversität Hagen 1985, erneuerte Auffassung, in: ders.: *Aus der Geschichte lernen?*, München 1988, S.131 ff.; Jordan: *Theorien und Methoden*, S.153; Jakob Tanner: *Historische Anthropologie zur Einführung*, Hamburg 2004, S.79.

(69) Alf Lüdtke: „Alltagwirklichkeit, Lebensweise und Bedürfnisartikulation. Ein Arbeitsprogramm zu den Bedingungen 'proletarischen Bewußtseins' in der Entfaltung der Fabrikindustrie“, in: *Gesellschaft. Beiträge zur Marxschen Theorie 6*, Frankfurt a.M. 1978, wieder gedruckt in: ders.: *Eigen-Sinn. Fabrikalltag, Arbeitererfahrungen und Politik vom Kaiserreich bis in den Faschismus*, Hamburg 2015 (1993¹), S.45–51, 56.

さらにリュトケは「日常の現実」の再構成を扱った1982年の論文では、分析の「対象（客体）」を「主体」として扱うべきだとする。リュトケはファシズム期の日常についての詳細な叙述がファシズム支配の官僚制的統制とテロルのメカニズムの分析に役立つのか、日常的現実への関心は瑣末さの誇張ではないかと問うて、支配と反対、甘受と抵抗の「日常的同時性」としての日常的（再）生産を明らかにする。リュトケの意図は、全体社会の構造の「内側」を眺めるプロジェクトの問題を明らかにすることにある。⁽⁷¹⁾

この1982年論文でリュトケは、19世紀後半における工業労働者の経験と潜在的行動力に関する自分の研究を例に、「参与観察」を提示する。日常を単なる「私的」領域とみる社会構造史に対して日常史は、日常生活における生産様式と生産関係の矛盾と非同時性を強調し、人々が外的強制への加工・変更・廃棄に注目する歴史学であるとみなす。客観的契機と主体的契機の相互の表出が社会的再生産を可能にするとみなして、リュトケは甘受・距離・抵抗の同時性を強調する。⁽⁷²⁾

この論文におけるリュトケの貢献は二つの方向にある。第一は、生存とアイデンティティ発見の多層的な結びつき、日常的に生き延びていくことの強調である。この日常的に生き延びていく論理は抵抗に固定されるだけではなく、自分流や「勝手気儘（Eigen-Sinn）」をもつものとして重視する。第二は、「非政治化」「政治の私的化」は「私的なものの政治化」の反射であり、日常的再生産が政治的な実践であることを示す。拒否あるいは勝手気儘な行動において私的なものと政治的なものとの間を峻別すべきではなく、日常生活の生産と再生産における「日常政治」の意味づけ、「私的な」と「政治的」なものとの交差が重要となる。知覚と意味づけは独自の「私的な」政治にあるという。換言すれば、「上から」の国家政治と組織政治に対しては、主体性の日常の実践を対置させ、職場・営舎・街頭での政治的勝手気儘さを対置させる。⁽⁷³⁾

ここから明らかになるのは、リュトケが1980年の論文で「内面性」への私的な撤退として表現した人々の態度・行動を82年の論文においては、「勝手気儘」に概念化したということである。リュトケにおけるこの転換をもたらしたのは、文化人類学を媒介とした歴史人類学的社会史である。これについては第V章で扱うことにしよう。

第4節 コミュニケーション的「日常史」——ニートハマーとポイカート

ドイツの歴史学で「日常史」を主導していた一人がエッセン大学のニートハマー（Lutz Niethammer）

(70) Alf Lüdtke: „Arbeitsbeginn, Arbeitspausen, Arbeitsende. Skizzen zu Bedürfnisbefriedigung und Industriearbeit im 19. und frühen 20. Jahrhundert“, in: *Sozialgeschichte der Freizeit*, wieder gedruckt in: ders.: *Eigen-Sinn*, S.83, 91 f..

(71) Alf Lüdtke: „Rekonstruktion von Alltagswirklichkeit–Entpolitisierung der Sozialgeschichte?“, in: *Klassen und Kultur*, S.322, 325 ff.

(72) Lüdtke: „Rekonstruktion von Alltagswirklichkeit“, S.327–330.

(73) Lüdtke: „Rekonstruktion von Alltagswirklichkeit“, S.335 f., 339–344.

である。1980年に日常史について論文を公表し、社会史的「問題設定の拡大」と「視角の転換」から「日常史」の積極的意義を主張した。その例として、フランスからは歴史学ではブローデル、ルゴフ、ル＝ロワ＝ラデュリなど、歴史学を超えてルフェーブル（Henri Lefebvre）やフーコー（Michel Foucault）、ブルデュー、英米からは「経験」と「文化」への関心、とくにイギリスのトムスンや「ヒストリ・ワークショップ」運動に注目する。⁽⁷⁴⁾

ニートハマーは、社会経済史における統計的なもの、政治史では運動ないし社会政策の対象に匿名化された物的な諸条件から歴史を構成する歴史学に対抗して、人々の主体的加工を重視し、その加工形態を記録する方法としての「オーラルヒストリ」を強調する。⁽⁷⁵⁾

ニートハマーは日常史への方法論的な飛躍を、精神史・国家史の高みから、全体の制度を理論的に構造化する社会構造史的な把握を経て、部分領域における「ザッへ自体」への下降という変化に見出している。労働史の領域でいえば、労働運動の理論と綱領、組織史から出発して、階層化・流動性・抗議分析を経て、職場・居住、労働者文化、「底辺の過程」への変容である。これらの研究は全社会的な関連を扱う理論から出発し、理論の欠陥を経験的な視野の拡大によって充足する形で行なわれていた。環境問題や女性問題など直接的な具体的経験に関わる生活世界に遭遇することによって、歴史研究自体が生活世界の断面への着目と研究者自身の観点からこの経験に到達しようとするところに日常史の意義を見出した。⁽⁷⁶⁾

日常における主体的経験と行動に注目する日常史は、ニートハマーによれば、一つは、人々を歴史における主体として把握し、過去と現在の間の歴史主体間の相互媒介としての「コミュニケーション的歴史学」に至ろうとし、もう一つは、日常そのものを定めつつ、生活世界を社会内部また全社会的な過程の現象とみなすこと（日常の「歴史化」）で、理論的な営みを行なっているという点において、観点の転換を開こうとする試みであった。⁽⁷⁷⁾

日常史論者としてポイカート（Detlev Peukert）も挙げるべきであろう。1982年の論文「労働者の日常」において、ポイカートは、日常史的研究を「ミクロ史」へ帰属させることはむしろその可能な発見の重要性を誤って理解することになり問題だとみなす。⁽⁷⁸⁾

1970年代後半から80年代にかけて行なわれていた、労働者の地域的社会的出自など社会学的社会史研究から離脱し、労働者自身の社会的知覚形態と社会文化的な態度様式の考察への転換を求め

(74) Lutz Niethammer: „Anmerkungen zur Alltagsgeschichte“ (1980), in: *Geschichte im Alltag – Alltag in der Geschichte*, hrsg.v. Klaus Bergmann und Rolf Schörken, Düsseldorf 1982, S.11, 17 f.

(75) Niethammer: „Anmerkungen zur Alltagsgeschichte“, S.18.

(76) Niethammer: „Anmerkungen zur Alltagsgeschichte“, S.20 ff.

(77) Niethammer: „Anmerkungen zur Alltagsgeschichte“, S.22 ff.

(78) Detlev Peukert: „Arbeiteralltag – Mode oder Methode?“, in: *Arbeiteralltag in Stadt und Land. Neue Wege der Geschichtsschreibung*, hrsg.v. Heiko Haumann, Berlin 1982, S.14.

た。ポイカートの日常史を自覚的に「底辺の歴史」と「労働者文化史」へ向かう形で方向づけるものとして捉えている⁽⁷⁹⁾。

「底辺の歴史」は、「上から」の視角から解放され、日常的経験を組み入れた「下から」の観点から行なうことで、「底辺」と全体との間の相互関係の再構成が可能になるものとされる。一方、「労働者文化史」は、「底辺」での労働者文化へ向かい、非物質的文化の諸局面、生活世界の経験の象徴的表現、非公式の生活世界的に刻印された文化を扱う⁽⁸⁰⁾。

心性史研究はドイツの日常史では、家族・子供・青年・居住の歴史、労働の経験、社会的衝突の歴史として実践され、人々の行動から、また権力のフィールド内部での経験を通して経験的に研究されており、ポイカートによればその際、二つの問題が提起されている。一つは、生活史的な聞き取り、コミュニケーションの過程としてのオーラルヒストリであり、もう一つは、社会的規律化と「平民的文化」との衝突である⁽⁸¹⁾。

オーラルヒストリは、歴史家と同時代証言者との間の対話の過程として、重要な歴史的方法と位置づけられる。生活史的聞き取りはその時々でのコミュニケーションの状態に依存するという史料批判の問題、唯一的なものや典型的なものとの関係の問題が提起され、ポイカートはオーラルヒストリを、新たな史料としての価値、類型形成と体系の一般化の限界をあばく批判的脱類型化の可能性として評価する⁽⁸²⁾。

社会的規律化と平民的文化との衝突の問題については、ポイカートは「生活世界の植民地化」との関係で日常史の存在意義を強調する。日常史を近代化論に対抗して、近代階級社会の社会的規律化による「生活世界の植民地化」に対する反論として位置づける。「態度基準と生活様式の段階的合理化」が、支配階級と社会下層民の間の主要な戦線においてばかりではなく、市民層の自己規律化にも刻印されているとする。ポイカートは、伝統的な社会においては困窮と強制が内在し、その一方で、近代的合理的制度は貧困者や社会的弱者への扶養と安全、保証を提供するものとみなす。その上で、日常史は労働者のみならず、若者、女性、移民・外国人、失業者など周縁化された集団の生活世界を扱い、社会構造史に対して批判的であるばかりではなく、歴史学の限界を超えて民俗学との協力関係に入ろうとするものとして評価する⁽⁸³⁾。

第5節 日常史の分裂へ——リュトケとポйкаートの対立

このポйкаートの議論、とりわけ社会的制度の変化と個人的経験の媒介に関して、リュトケは即

(79) Peukert: „Arbeiteralltag – Mode oder Methode?“, S.16–18.

(80) Peukert: „Arbeiteralltag – Mode oder Methode?“, S.20 ff.

(81) Peukert: „Arbeiteralltag – Mode oder Methode?“, S.22 ff.

(82) Peukert: „Arbeiteralltag – Mode oder Methode?“, S.25 f.

(83) Peukert: „Arbeiteralltag – Mode oder Methode?“, S.27–32.

座に批判的に反応した。雑誌『論争 (Das Argument)』(1983年)においてリュトケは、ポイカートの直線的なモデル、近代的工業社会以前と工業社会の二つの時代の区別に依拠した「生活世界の植民地化」概念が短絡的であるとして批判する。近代以前の生活世界的経験、象徴的に媒介された伝統と規範は近代的規律化以前においても矛盾していたし、支配者と官憲の多様な介入にさらされた民衆の日常は、社会的政治的不平等の下、「反抗と承認の混合」によって特徴づけられるとする。ポイカートにおいては近代の貫徹に対する非承認と反抗は一時的なものであり、「同時的なものの非同時性」の認識が欠如しているという。ポイカートの「態度基準と生活様式の段階的合理化」は支配者の利害と意図を示すにすぎず、民衆の多層的生活様式はこの合理化によって変化を被るとはいえ、自分たちの空間を創造する「(再)領有 ((Wieder)-Aneignung)」⁽⁸⁴⁾、独自の生活実践、「勝手気儘」は打破されないとリュトケは主張する。

リュトケのポイカート批判のもう一つの論点は「私的なものの政治化」と「政治の私的化」をめぐるものである。「政治の私的化」の意味するところは、被支配者が資源と表現形態を(再)領有すること、欲求(希望、望み、心配)の明確化と満足である。自分たちの空間を創出することをねらいとするが、重要なことは不当な要求から距離をおくということである。他方で「私的なものの政治化」で浮き彫りにされるのは、「非同時的な」政治化の過程である。リュトケは、ポイカートの「市場体系と権力体系」と「日常」の区別は、市場体系と権力体系が日常において批判され、同時に承認され、変化される点を看過していると批判する。19世紀末の二世代の機械製造工を例に、彼らの暴力、飲んだくれ、道具の窃盗などから、男性の威圧行為と同時に相互の知覚と承認、さらには犠牲者の共犯者への転化を見出す。自分と日常の不安定さとの間に勝手気儘に距離をおくことには、酔っぱらうとか、同僚に対して道具の窃盗を働くとかの行為が対置しえたとみなして、リュトケは勝手気儘な「領有」⁽⁸⁵⁾の多様性を強調する。

リュトケは、勝手気儘な行動空間の長期的な拡大を理論的な構想の視野に入れるべきであり、抵抗、甘受・堪忍、距離の同時性を見つけるべきだと主張する。⁽⁸⁶⁾

このリュトケの批判に対してポイカートは同じ雑誌『論争』の同じ号で反論した。リュトケの「同時的なものの非同時性」は理解できないとして退け、鉱山労働者の居住・労働領域における非公式の連帯構造は「非同時的」ではなく、むしろ都市化と工業化がもたらした生存問題への時代に即した自助的応答であるとみる。リュトケの「勝手気儘」と「日常政治」の両概念は、日常行動を支配的な政治戦略との関係でのみ把握しており、その他者性は最初の一步であるとはいえ、それを超え

(84) Alf Lüttke: „›Kolonisierung der Lebenswelten‹- oder Geschichte als Einbahnstraße? Zu Detlev Peukerts ›Arbeiter-Alltag – Mode oder Methode?‹“, in: *Das Argument*, 140, 1983, S.536 ff.

(85) Lüttke: „›Kolonisierung der Lebenswelten‹“, S.538 ff.

(86) Lüttke: „›Kolonisierung der Lebenswelten‹“, S.541.

て、市民的生活世界とプロレタリア的生活世界の間の対照、文明化ないし合理化構想で研究することが重要だとポイカートの⁽⁸⁷⁾強調する。

さらにポイカートの業績は見方の細分化によって平板な歴史像を切り刻むことではきて、再び思想的に関連させ歴史の全体像をもたらすことができていない、と批判する。リュトケには暗黙の包括的にすぎる仮定があるとして、それ自体を問題にする。「勝手気儘」と「私的なものの政治化」構想において、秩序基準として非常に一般的な支配・抵抗の弁証法が貫徹しており、この静的な仮定と被支配者の態度の細分化は、変化の過程の分析には役に立たないとリュトケを批判する。⁽⁸⁸⁾

リュトケの明確な概念性も包括的にすぎる仮定も、「被支配者」の生活様式への眼差しの狭隘化からくるとポイカートの見方はみる。こうした概念性では把握できない生活様式の局面は気づかれぬままになる危険があり、また近代世界の貫徹が過程的性格をもつということが無視されることになるとして、ポイカートの、社会的規律化と合理化に対する民衆の抵抗を社会ロマン主義的に美化せず考察するには、体制と生活世界の緊張関係、近代化（合理化）過程の解放的な面とその病理的な側面の両面を究明することが重要であると強調する。⁽⁸⁹⁾

「日常史」は、子細な事象にこだわり、かつ理論的に導かれた「濃密な記述」（ギアーツ）である。理論的な一般化よりも歴史的・具体的なものに優位をおく。リュトケが主張するように、非同時的なもの・勝手気儘・日常政治的なものに、支配・抵抗の弁証法を展開することは有益だろう。ポイカートの「上から」の秩序意図というフーコー流の悲観主義、民衆の自立的な非公式の自発的動きの理想主義、こうした一面的な理論的立場から脱し、近代化と生活世界の関係性をめぐる異なる研究戦略の「平和共存」へと移行することを提案する。⁽⁹⁰⁾

コッカが1984年の「歴史人類学」に関する論文において、日常史家が一枚岩ではなく、一方でメディック、セビーアン（David Sabean）、リュトケ、他方でポイカートの日常史の違いを確認し、前者の日常史を批判しているのに対し、ポイカートの日常史には理解を示し、このポイカートの日常史に社会構造史の豊富化を展望していた。⁽⁹¹⁾このコッカの論文が掲載された論文集で、ポイカートの論文「最近の日常史と歴史人類学」を掲載している。そこでポイカートが主張しているのは、トムスン流の日常経験とグローバルな構造と過程との間の媒介である。抵抗と「勝手気儘」というより

(87) Detlev Peukert: „Glanz und Elend der ›Bartwichserie‹. Eine Replik auf Alf Lüdtke“, in: *Das Argument*, 140, 1983, S.542 f.

(88) Peukert: „Glanz und Elend der ›Bartwichserie‹“, S.544 f.

(89) Peukert: „Glanz und Elend der ›Bartwichserie‹“, S.545 f.

(90) Peukert: „Glanz und Elend der ›Bartwichserie‹“, S.548 f.

(91) Jürgen Kocka: „Historisch-anthropologische Fragestellungen – ein Defizit der Historische Sozialwissenschaft?“, in: *Historische Anthropologie. Der Mensch in der Geschichte*, hrsg.v. Hans Süssmuth, Göttingen 1984, S.81.

はむしろ、近代化への適応の過程を日常史的に解明することに重きをおく。⁽⁹²⁾

ポイカートの近代化における態度変化を、一方で日常的な子細な事象のマイクロ史的再構成、他方で構造と過程のマクロ史的構想との理論的媒介に仕上げようとする。その際にポイカートが理論的に依拠するのが、しばしば登場するハバーマス（Jürgen Habermas）の『コミュニケーション的行為の理論』（1982年）である。近代社会の成立を体系的論理と生活世界的論理の弁証法的緊張として叙述し、歴史のマイクロとマクロの次元を媒介し、経験と体系分析、人類学的問題設定と社会構造的歴史的問題設定を媒介することのできるものと評価する。⁽⁹³⁾

その際にポイカートが目にするのが、合理化過程の解放的側面と同時に病理的作用であり、ハバーマスがこれを「生活世界の植民地化」として定式化して批判の対象にした点である。近代化過程の病理的側面の批判的考察を媒介として、ポイカートは体系的論理と生活世界的論理の競合から出発する二重の構想に日常史研究の展望を見出す。⁽⁹⁴⁾

1982年の時点でリュトケに「平和共存」を提案したポイカートは84年には再びリュトケ批判の立場を鮮明にした。論点は以下の二点に集約できる。第一に、多層性・主観性・非同時性・日常政治・勝手気儘などのリュトケの概念は、対象の一面のみを強調することによって一般化を蔑ろにしている、として批判し、日常史の負の側面をあぶり出す。第二に、日常は複雑な非日常的構造と過程によって浸透されており、日常史には構造・過程と日常の両者を媒介する理論が必要であると主張する。⁽⁹⁵⁾

IV. 方法としてのオーラルヒストリ

日常史の方法論的基礎の一部として、また一次史料とならんであるいは一次史料に代わるものとして重要な役割を果たしたのがオーラルヒストリである。エッセン大学のニートハマーの下で実施されたプロジェクト『1930–1960年のルール地方における生活史と社会文化』は3部作として1983年から85年にかけて公刊された。⁽⁹⁶⁾主として労働者家族の200人を対象に実施された生活史・日常史に関するインタビューからなる本プロジェクトは、彼らの経験の意義と特殊性を解明することをねらいとしている。文書史料による歴史研究では捉えられなかった労働者階級がファシズム、戦争、1950年代の工業化をどのように経験したのか、を追跡することを課題とし、ファシズムに対する民

(92) Detlev Peukert: „Neuere Alltagsgeschichte und Historische Anthropologie“, in: *Historische Anthropologie*, S.60.

(93) Peukert: „Neuere Alltagsgeschichte“, S.61, 64; Jürgen Habermas: *Theorie des kommunikativen Handelns*, 2 Bde., Frankfurt a.M. 1981. 邦訳『コミュニケーション的行為の理論』（上、中、下）川上倫逸他訳（未來社、1985・87年）。

(94) Peukert: „Neuere Alltagsgeschichte“, S.66.

(95) Peukert: „Neuere Alltagsgeschichte“, S.68.

衆の合意と抵抗の間にある日常的な二律背反的实践と経験を明らかにする。本プロジェクトは、ファシズム後の西ドイツ社会における人々の経験を模索したところにも新味がある⁽⁹⁷⁾。

前章で述べた日常史の構想的位置づけの対立にもかかわらず、オーラルヒストリが日常史の方法論的な要である点については見解の相違はない。ニートハマーによれば、オーラルヒストリの意義は、声を残せなかった人々の経験と主体性に接近できるだけではなく、現代史の発見の道具であると同時に新しい知覚可能性、すなわち、経験の次元で特殊な断片的・事例的方法によって新しい知覚のための基礎をも提供するところにある。その際ニートハマーはブルデューの「実践」論、またギアーツ、ドイツの歴史家ではメディックに依拠する⁽⁹⁸⁾。

オーラルヒストリは人々の主体としての歴史的表現と実践から出発することによって、日常生活状況の社会・文化史に至る「質的な社会史」でもあり、伝統的な歴史学ならびに社会構造史の両方に対する批判として位置づけられる⁽⁹⁹⁾。

ニートハマーは、主体の歴史的表現と実践としてのオーラルヒストリは「経験史」でもある、とみなす。この経験史には社会・文化的無意識の領域が含まれるとして、経験史が、伝統的な歴史学も社会構造史も共に説明できていない物的・社会的・精神的变化の間の関係を展望可能にするという。その一つの試みとしてアナール学派からの心性史の変種（表象ないし感情の歴史）を問題とする。ニートハマーが問題にするのは、いかにして長期的な構造的諸条件と個人的集合的知覚と意味づけを結びつけるのかである。「経験」概念が重要な位置を占め、これを社会史的にはじめて適用した歴史家はトムスンだとする。しかしこの生活状況の長期的構造とアクチュアルな意識を結合する「より深い層」の解明のために、社会科学ないし人類学からの構造的構想を導入すれば、意識の表出的主体性と構造の構成された客観性との間には思考の空隙が残るといふ。この経験の空隙を埋めようとしたのがブルデューのハビトゥスと実践概念だとして高く評価するのである。このように、オーラルヒストリは歴史研究の戦略の拡大を要請すると同時に構造史的な研究との結びつきを必要とする⁽¹⁰⁰⁾。

(96) Lutz Niethammer (Hrsg.): „Die Jahre weiß man nicht, wo man die heute hinsetzen soll.“ *Faschismuserfahrungen im Ruhrgebiet*, Berlin/Bonn 1983; Lutz Niethammer (Hrsg.): „Hinterher merkt man, daß er richtig war, daß es schiefgegangen ist.“ *Nachkriegserfahrungen im Ruhrgebiet*, Berlin/Bonn 1983; Lutz Niethammer/Alexander von Plato (Hrsg.): „Wir kriegen jetzt andere Zeiten“. *Auf der Suche nach der Erfahrung des Volkes in nachfaschistischen Ländern*, Berlin/Bonn 1985.

(97) Lutz Niethammer/Alexander von Plato: „Vorwort“ zu „Wir kriegen jetzt andere Zeiten“, S.9 f.

(98) Lutz Niethammer: „Fragen–Antworten–Fragen. Methodische Erfahrungen und Erwägungen zur Oral History“, in: „Wir kriegen jetzt andere Zeiten“, S.419 f.,423 ff.

(99) Niethammer: „Fragen – Antworten – Fragen“, S.427.

(100) Niethammer: „Fragen – Antworten – Fragen“, S.428 ff., 433.

本プロジェクトが方法論的に対決しようとしたナチス研究の一つは、イギリスのドイツ史家メイソン (Timothy W. Mason) のドキュメントに依拠するナチス研究である。プロジェクトはオーラルヒストリによって、労働と生活様式、ナチスの政治的な意図と労働者の社会的アイデンティティの間の関係、ファシズム経験が労働者層に与えた影響を扱う。プロジェクトを総括したヘルベルト (Ulrich Herbert) によれば、対象となるのは、ナチスのテロルに直接被害を被っていない人々の社会状態と生活様式である。したがってナチ政権掌握の 1933 年ではなく、ナチ支配の過程における生活様式の変化が画期であった。35 年以降に進行した、安定した職場、ナチスの社会政策的な攻勢、街頭から経営へ、ミリューから家庭への生活の重点移動がこの変化の画期をなし、「私的領域」への後退、集团的団結からの引き剥がし、「個人化」が現象したとみる。⁽¹⁰¹⁾ 戦時期については、生活史的には、戦争に結びついた画期は 39 年 9 月ではなく、労働者は 41 年以降、外国人労働者と戦時捕虜の労働配置により職長などへ上昇もし、若い女性にとっても、社会的統合の能動的な要因へと役割が変化したとみる。43 年に入り、空襲が体制への合意の崩壊をもたらす決定的契機となった、と結論づける。⁽¹⁰²⁾

ナチ時代についてのオーラルヒストリからヘルベルトは次のように結論づける。第一に、労働者層にとってのナチ社会政策は経験された現実ではなく、新しく生じた未来への希望によって想起されたものであり、したがってポジティブに評価された。第二に、若い労働者にとってはナチ時代の経験は社会的上昇、近代性、業績中心主義を意味するものであり、ポジティブに位置づけられた。第三に、労働者層の政治的方向性は変化し、労働者層における社会主義的な自明性は朽ちた。第四に、1935 年以降の家族への方向づけが強化され、家族への欲求は物的感情的安定の最後の砦であった。⁽¹⁰³⁾

戦後については、生活史的には終戦は転換点ではなく、戦時期の終わりは 1948 年 6 月 21 日の通貨改革であったが、戦後期においても職場と家族が新たに逃避の場所になり、自分たちだけの居住で外に対して区切られた小家族形成への憧れが重要な意味をもつようになった。ただし、戦後期の住民の生き残り戦略は自助と隣人であったが、若い労働者にとってはもはやそうではなかった。50 年代に関しては「平穏な時代」と位置づけられ、労働と家族（「家族生活」と子供の教育）が中核的な存在となった。⁽¹⁰⁴⁾

このように、人々の過去への想起から構築される時代像は、歴史研究で明らかにされる現実像とギャップがある。日常史はオーラルヒストリによって、現実の生活の再構成を行なおうとしたのであり、歴史的事実は存在せず、存在するのは過去の記憶だけであるというポストモダニズムに依拠していたのではない。⁽¹⁰⁵⁾

(101) Ulrich Herbert: „Zur Entwicklung der Ruhrarbeiterschaft 1930 bis 1960 aus erfahrungsgeschichtlicher Perspektive“, in: „Wir kriegen jetzt andere Zeiten“, S.20, 24–29.

(102) Herbert: „Zur Entwicklung der Ruhrarbeiterschaft 1930 bis 1960“, S.31–34.

(103) Herbert: „Zur Entwicklung der Ruhrarbeiterschaft 1930 bis 1960“, S.35 f.

(104) Herbert: „Zur Entwicklung der Ruhrarbeiterschaft 1930 bis 1960“, S.37 f., 40, 43 ff.

日常史は一方で、歴史における自立的な行動主体の復活をもたらしたが、他方ではとりわけオーラルヒストリに依拠することで、歴史学のロマン主義化をもたらしもした。ナチスを生き残った人々のうち、ナチスの迫害を受けなかった人々の経験史とナチ時代の記憶・想起は、ナチスの迫害を受け生き延びた人々の経験と記憶・想起とは当然ながら異なる。共に経験であり想起である。「経験された」生活史が言葉で表現されることによって、経験は「物語られた」生活史になる。日常史が駆使するオーラルヒストリは、この「経験された」生活史を「物語られた」生活史に転化させる手段である。この物語られた生活史が日常史と現実との関連性を乗り越えていく一歩手前まで来ている。

ドイツではこの乗り越えは簡単にはなされなかった。「ホロコースト」の存在が制限をかけていたからである。それでも物語研究と言語論はこの物語られた生活史に新しい刺激を与えた。ホロコーストを知らなかったという語りは自分の身体でホロコーストを体験しなかったという経験に関連し、また加害の側の語りは、共犯から承認、忠誠的行動に至るまでの多様な経験に関連していたにもかかわらず、しばしば罪や責任を抑圧するものであった。ここには経験そのものの二律背反的な意義が示されている。⁽¹⁰⁶⁾

すでに述べたように、現実の生活を再構成しようとした経験史としての日常史は、とりわけオーラルヒストリがその方法として使われるため、主体の物語へ陥る可能性と現実性を示している。記憶と想起は人工物であり、語りは、オーラルヒストリにおいて調査対象となった人々が経験し想起した場所と時間よりはむしろ、インタビューの場所と今に関連している。想起は原理的に過去を振り返る見方であり、したがって表明と解釈のし直しを意味する。そこから、すべての史料も同様に現実の反映ではなく、現実の意味づけであり、したがって選択的であり、見方と結びついており、解釈し論議する位置づけを必要とするという考えが登場することになる。⁽¹⁰⁷⁾

主体の物語への日常史の転換が結論づけられるのか。1988年に自伝研究・オーラルヒストリの専門雑誌 *BIOS*⁽¹⁰⁸⁾が創刊されたことも一つの指標として考えられるが、94年にベルリンの「歴史工房」編集の論文集『日常文化』が公刊された時には、日常史は80年代の議論を踏まえて、オーラルヒストリや自伝研究はどのように位置づけられたのだろうか。⁽¹⁰⁹⁾

過去における普通の人々の日常と生活はしばしばオーラルヒストリによって発見される。日常史は、数量的な社会研究の一般性・客観性に対して、自伝的な研究の個人性・主体性、構造に対して経験、量に対して質、こうした二重性を克服しようとする。人々の生活を歴史的な構造と過程の中に組み入れ、その一方で、人々の生活は社会的現実を構成するものだとみなすことによって、日常

(105) Hartewig: „Wer sich in Gefahr begibt, kommt (nicht) darin um“, S.117.

(106) Hartewig: „Wer sich in Gefahr begibt, kommt (nicht) darin um“, S.118 ff.

(107) Daniel: *Kompendium Kulturgeschichte*, S.306 f.

(108) *Zeitschrift für Biographieforschung, Oral History und Lebensverlaufsanalysen*.

(109) Berliner Geschichtswerkstatt (Hrsg.): *Alltagskultur, Subjektivität und Geschichte. Zur Theorie und Praxis von Alltagsgeschichte*, Münster 1994.

史は両者の弁証法的な相互関連を明らかにしようとする。ナチスの迫害（「水晶の夜」）を例にローゼンタール（Gabriele Rosenthal）は、ユダヤ人に対する暴行などなかったという証言を「経験された現実」、「物語られた現実」とみなして考察する。物語られた生活史は経験された現実の再構成であり、同時にその産出の現在と結びついている。ローゼンタールは、ナチスの犯罪者と犠牲者の経験された現実を除外して、ナチスの迫害の加害者でも被害者でもない多数派の集合性の経験された現実から、ナチスの社会的現実を推論すれば、迫害と絶滅政策の現実⁽¹¹⁰⁾は捉えられないと主張する。

フランスのノラを中心とする「記憶の場」が歴史学に新たな研究領域と歴史と記憶に関する新たな問題を提起し始め、（西）ドイツでは敗戦後40周年（1985年）の後に、保守的な歴史家ノルテ（Ernst Nolte）の問題提起によりいわゆる「歴史家論争」が始まった。この論争には日常史を主張する歴史家は参加していない。彼らの不参加が何を意味するのかは今後の課題となるだろうが、この論争においてはナチスやホロコーストをどのように解釈するのかについて議論されており、ホロコーストの事実の存在そのものが疑問視されることはなかった。ベルリンの「歴史工房」は主体の物語による社会的現実の超克に対してむしろ歯止めをかけていた。フランスの「新しい文化史」の方向に向かいつつも、ポストモダニズムには至らなかった。その理由の一つはナチスの過去の現実であった。

V. 歴史人類学的社会史研究

第1節 『階級と文化』（1982年）

社会構造史を批判したもう一つの歴史研究の方に話を移すことにしよう。これは、イタリアの「ミクロストーリーア」、アメリカの文化人類学、フランス・アナル学派、さらにイギリス社会史の影響を受けて行なわれた初期近世期の歴史人類学的社会史研究である。文化は社会の特別な領域ではなく、総体が文化であるという考えに立脚して、社会関係の社会的・文化的再生産領域、日常生活を研究対象としている。社会構造史が18世紀末以降の工業化社会に限定しているのに対して、前資本主義的社会を対象に、家族の生存のあり方、農民・農村工業家族を研究対象とし、例外・特殊なもの、都市と農村における抵抗、普通の人々の地域性を詳らかにし、「モラル・エコノミー」概念を実証する。

アメリカで始められた「プロト工業化」論に触発されて、ドイツでも、農村における手工業的商品生産の研究が人口史・家族史と地域史という新しい対象領域を内包して展開された。1977年に出版された『工業化以前の工業化』は、地域的ならびに超地域的関連において農村における手工業生産を研究対象とし、この観点から、経済史研究の論争点であった封建的農業社会から産業資本主義への

(110) Gabriele Rosenthal: „Die erzählte Lebensgeschichte als historisch-soziale Realität. Methodologische Implikationen für die Analyse biographischer Texte“, in: *Alltagskultur*, S.125, 127 f., 130–134.

移行問題に迫ろうとした。方法論的には理論的な関心と経験的研究を融合する中間の道、「理論的・叙事的混合形態」として位置づけられている⁽¹¹¹⁾。しかし社会構造史に対する批判的観点が前面に出たというよりも、社会構造史が研究対象にする工業化の時代よりも前の時期に注目する意味で、研究対象に関わるものにとどまっていた。

本書の編者の一人シュルムボーム (Jürgen Schlumbohm) は、1979年の論文において、1771年から1855年の亜麻の生産・価格の数量的分析によって、季節による変化を抽出し、それを自然に規定された四季のリズムが決定的な意義をもった伝統的な前工業的生産・生活様式に位置づける。彼は季節的流動性をもつ伝統的な経済から近代的な形態への移行は一直線ではなかったこと、自然とその一年の経過は社会的に媒介され、「近代的なもの」は「伝統的なもの」から鋭く区別されるわけではなく、資本主義以前の時期においても、生産・生活様式は自然に従属したわけではなく、心性と社会の諸要因にも規定されていたと主張した⁽¹¹²⁾。

この『工業化以前の工業化』の後のマックス・プランク歴史研究所による歴史人類学的社会史研究が、社会構造史批判のもう一つの拠点となった。方法論的論争で重要な役割を果たしたメディックやリュトケがこの初期近世期社会史研究で中心的な位置を占めていた。

1982年に公開された『階級と文化』のサブタイトル「歴史叙述における社会人類学的観点」が示しているように、歴史学を社会人類学的観点から実践することが、社会史の袋小路から抜け出る方向とみなした。編者のリュトケとメディックが「はじめに」で述べているように、社会学・経済学・政治学・社会心理学の構想と理論の受容を超えて人類学へ向かうことによって歴史学の転換を図ろうとした⁽¹¹³⁾。

「序論」でリュトケとメディックは、人類学的な「自己と他者にとっての意味」から一次史料を研究することに、社会構造史に対する「オルターナティヴ」をみる。階級形成と階級表現、階級と文化を「モノ」としても、また数量的なやり方において考察するのでもなく、当事者にとっての「意味」を問う。人間間の系列的な相互関係において、状況と人々の行動の関連において扱う。彼らが依拠するのはイギリスの社会史家トムスンである。階級関係の内的な力学、階級関係の内的論理を規定する矛盾と裂け目に注目する。こうした階級理解の基礎を提供するのが「文化」とみなされる。この文化は人類学的眼差しの文化であり、人工物・テキスト・信仰体系・出来事の収集としてばかり

(111) Peter Kriedte/Hans Medick/Jürgen Schlumbohm: *Industrialisierung vor der Industrialisierung. Gewerbliche Warenproduktion auf dem Land in der Formationsperiode des Kapitalismus*, Göttingen 1978 (1977¹), S.23, 25 f., 31, 35.

(112) Jürgen Schlumbohm: „Der saisonale Rhythmus der Leinenproduktion im Osnabrücker Lande während des späten 18. und der ersten Hälfte des. 19. Jahrhunderts: Erscheinungsbild, Zusammenhänge und interregionaler Vergleich“, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, XIX. Band, 1979, S.296 ff.

(113) Alf Lüdtke/Hans Medick: „Vorwort“ zu *Klassen und Kultur*, S.7.

ではなく、社会の文化、その価値・規範・規則を表現し、規制するものでもある。文化とは日常的衝突と緊張の表現をも包括する概念とされる。こうした「過程」としての階級と文化の理解が、社会的関係が表現され媒介される様式と形態の分析を可能にし、同時に、文化と生活様式に存在する裂け目が社会的関係の変化をもたらすものと主張する。⁽¹¹⁴⁾

リュトケとメディックは、被支配階級は強制なしに支配を承認すると同時に象徴の新たな受容によって支配者に抵抗もする存在とみなし、文化は支配の貫徹と同時に抵抗のアリーナとしても把握する。こうした文化理解は日常実践を示す経験の理解に通じる。経済的依存性と支配的介入は人々の経験を生みだしたばかりでなく、彼らの経験と意味付与はこの過程の一部であるということである。ここで彼らが依拠するのは、「公然たる暴力」(直接的, 物理的, 経済的)と「象徴的」「ソフトな」暴力の投入と有効性をテーマ化したブルデューである。⁽¹¹⁵⁾

本書に所収されたメディックの論文「平民文化、平民の公共性、平民の経済」は、「平民」層の物的文化を扱う。労働過程と消費における階級状態と階級位置がどのように表現され実践されるのかを示す。貧困な平民の贅沢な消費を例に、平民の態度の矛盾を示し、その社会的経済的論理を叙述する。頑固さ、抵抗、如才のなさを詳らかにする。メディックが唱える歴史学はトムスの文化理解に依拠する。文化は、人々が自分の社会的関係を経験し表現する慣習・規範・儀式的アンサンブルであり、生産様式と生産関係の運動と再生産の中心的要素である(「文化なくして生産なし」)。民衆文化的生活・経験様式の独自性と変化に適合することのできる概念として、「平民的公共性としての平民文化 (Plebejische Kultur)」概念を採用する。抵抗とならんで、支配階層・階級とその「文明化された」エリートへの依存性の「同時性」を示すために、社会下層民の生活表現と態度様式における「勝手気儘」(リュトケ)に注目する。⁽¹¹⁶⁾

その一方でメディックはトムスを批判の対象にもする。メディックが問題視するのは、新しい資本主義市場ならびに生産関係の強制と平民の態度・社会文化的習慣との間のトムスの仮定である。メディックが強調するのは、平民文化は積極的な異議申し立てのみならず、積極的に市場原理や強制に適應する力学の意味において二重だということである。⁽¹¹⁷⁾

こうしてメディックは、経済的観点から平民文化の中心点としての家族経済を考察することが重要だとする。小生産者の家族経済の「労働者・消費者バランス」、労働と消費を家族経済的に調整する社会論理が包括的な関連を規定するというのである。それは家計の収入と支出のバランスとは関

(114) Alf Lüdtke/Hans Medick: „Einleitung“ zu *Klassen und Kultur*, S.9 ff.

(115) Lüdtke/Medick: „Einleitung“ zu *Klassen und Kultur*, S.12 ff.

(116) Lüdtke/Medick: „Einleitung“ zu *Klassen und Kultur*, S.17; Hans Medick: „Plebejische Kultur, plebejische Öffentlichkeit, plebejische Ökonomie. Über Erfahrungen und Verhaltensweisen Besitzarmer und Besitzloser in der Übergangsphase zum Kapitalismus“, in: *Klassen und Kultur*, S.160 ff.

(117) Medick: „Plebejische Kultur“, S.166.

係がなく、欲求に依拠し、日常的生存の乏しい再生産は儀式、祭りや遊びへの高い支出と結びついてきた。搾取の日常的経験は原初的な階級闘争の手段となり、同時に「社会的交換」、場合によっては過酷な時期の一種の「社会保険」、親族・隣人・友人の絆を強化する連帯関係が成立したと主張する⁽¹¹⁸⁾。

結論的には、平民文化の「社会的論理」(トムスン)をさらにラディカル化することをメディックは構想している。これは、祭りと祝い、遊びとその他の度を越した使い果たしを、日常生活の行動と立場の表現の問題として考察すること、消費における小生産者の「象徴的行動」とみることを意味する。ここでメディックが依拠するのはブルデューの「象徴資本」である。消費は欲求の社会的表現としても捉え、極端な貧困という条件下においても社会下層民の消費は名誉・尊敬を実現する手段であったということである。⁽¹¹⁹⁾

第2節 『感情と物的利害』(1984年)

もう一つの歴史人類学的社会史研究が、1984年に公刊されたメディックとアメリカの歴史人類学者のセビーアンの二人の編集による『感情と物的利害』である。この社会人類学的ないし文化人類学的社会史研究が対象とするのは歴史における「他者」である。その重点は魔術・迷信・魔女制度のような生活・思考様式のみならず、むしろ「日常的な態度様式」という形においても存在する他者である。この新しい関心の背後には社会史の観点の転換があり、個人と集団の「行動と経験」が対象とされる。「文化と生活様式」、すなわち、民衆文化的な生活・表現形態、日常の現実、ジェンダー関係、家族の社会史が歴史的関心の中心的位置を占めるようになった。⁽¹²⁰⁾

このような社会史の観点の転換を行なおうとしたのは先に述べたメディックであるが、これまでのメディック自身の歴史研究の方向転換をも示すものである。このメディックの歴史研究の方向転換をもたらしたのは、『感情と物的利害』の編者の一人であるセビーアンである。メディックは彼とのこの共編著の序文で以下のように説明している。

レーヴィヤギンズブルグの「ミクロストーリー」の議論に触発されてメディックとセビーアンは、主体の発見、主体的な経験のテキスト解釈の可能性という問題に関わって、歴史的経験の文化的統一性と連続性の仮定はもはや保証されないとして、人類学の眼差しに依拠しようとした。その際に依拠する人類学は従来の構造人類学ではなく「新しい人類学」である。構造そのものを問題視する人類学、すなわち、主体的経験と客観的な構造との結びつきは歴史的变化から切り離せないことを

(118) Medick: „Plebejische Kultur“, S.166–169.

(119) Medick: „Plebejische Kultur“, S.170 ff.

(120) Hans Medick/David Sabean: „Einleitung“ zu *Emotionen und Materielle Interessen. Sozialanthropologische und historische Beiträge zur Familienforschung*, hrsg.v. Hans Medick und David Sabean, Göttingen 1984, S.12.

自覚して、歴史的観点に目を向ける人類学の眼差しである。この新たな「人類学的社会史」研究は、「意味」を社会的に生産・配置された意味として理解し、したがって社会の矛盾・対立・衝突から理解しようとする。本書のタイトルが示すように、この人類学的社会史研究は感情と物的利害の関係を扱う⁽¹²¹⁾。そこで参照されるのはブルデューの「実践」概念である。

他者の主体的な「感情」は直接には観察できないため、「意味の意味」、つまり、文化的に規定された感情的な「文法」、社会的関係の象徴的体系の一部としての感情の表現を問う。感情や価値という「ソフト」面と物的利害という「ハード」面の両面を歴史的な連続性において考察しようとする。その際に、感情と物的利害を所有関係、労働過程、社会の支配構造に埋め込むことによって分析する。メディックとセビーアンは所有と感情の二分法の問題を解決するために、ブルデューの「象徴的資本」の構想に依拠する⁽¹²²⁾。

メディックとセビーアンは感情と物的利害を家族内部で考察することから出発し、家族外の関係の「経験」と「知覚」へと展望する。行動、実践、変化を強調し、価値表象（観念）を絶えざる変化と創造の過程の結果とみる。彼らは、その中心的関心を家族関係と階級形成過程の相互作用におき、社会的階級の形成と展開における家族的感情と価値が演じる役割に注目する。社会的変化をもたらした社会制度の構造と行動論理を問う。こうした構造と行動がおかれる習慣と日常生活の実践の総体、これを文化とみなし、文化と文化的経験が表象をどのように反映し、再生産し、変化させるかという問題を扱うのである。ここでもブルデューに依拠する⁽¹²³⁾。

互いに排除するものと考えられていた、この感情と物的利害の関係性そのものを歴史研究の対象とすること自体が新しいといえる。家族生活の主体的客観的契機をどのように媒介すればいいのか、家族と親族における感情的な欲求と物的利害の関連の問題が未解決の問題として残っていた。メディックとセビーアンはこの『感情と物的利害』に序論以外に、論文「家族と親族における感情と物的利害——歴史的・社会人類学的家族研究の新しい道と領域への考察」を寄せてこの問題を扱っている。1970年代以降の欧米の家族史研究の関心に依拠しつつ、第一に、感情的ならびに物的局面の相互作用として家族経験を認識し、それを所有関係の力学の分析を通して理解すること、第二に、生産と支配のコンテクストから家族の力学の性格を浮き彫りにすることを課題とする⁽¹²⁴⁾。

感情を扱う歴史的・比較的观点は、感情が形成される社会的領域、具体的な物的利害と所有関係の特殊なコンテクストを明らかにするものである。社会的再生産の過程における絆、多層的な社会的交換の関係として家族関係を研究すること、その際、所有がどのように利害と感情を媒介するの

(121) Medick/Sabean: „Einleitung“ zu *Emotionen und Materielle Interessen*, S.13–16.

(122) Medick/Sabean: „Einleitung“ zu *Emotionen und Materielle Interessen*, S.17 ff.

(123) Medick/Sabean: „Einleitung“ zu *Emotionen und Materielle Interessen*, S.22 ff.

(124) Hans Medick/David Sabean: „Emotionen und materielle Interessen in Familie und Verwandtschaft: Überlegungen zu neuen Wegen und Bereichen einer historischen und sozialanthropologischen Familienforschung“, in: *Emotionen und Materielle Interessen*, S.28–31.

かを明らかにすることの重要性を強調する。ここでも社会人類学ないし文化人類学の研究が参照される。⁽¹²⁵⁾

VI. ミクロ史とマクロ史との対立

第1節 ミクロ史からの挑戦

こうした立場から歴史研究の方法論的転回を主張したメディックは、社会構造史の歴史研究に対抗することになる。論争そのものは、1984年ベルリンでのドイツ歴史家大会で、「日常史」に関して激しく行なわれることになった。そこで議論されたのは構造を重視する「マクロ史」に対して、人間の意識的無意識的行動を重視する「ミクロ史」、両者の歴史学の方法論をめぐる対立であった。⁽¹²⁶⁾

メディックは1984年の論文「ボートで宣教？」において、歴史現象の独自性、差異性、他者性に対する新しい眼差し、人間の経験の多様性を強調する民族学や歴史人類学の立場から、社会構造史に挑戦した。⁽¹²⁷⁾

先に述べた1982年の論文と同様にメディックはこの論文において、近代化・工業化の流れのあおりを被った人々の抵抗・要求、日常生活関連での構造と歴史主体の行動との関係、歴史の主体の再構成を行なったトムソンの「エージェンシー (Agency)」概念を掲げる。さらにメディックが依拠するのがギアーツである。ギアーツは、歴史主体を他者として認識し、この他者の文化と生活様式、文化的表現と活動を、社会的に生産された「テキスト」として考察する。この「濃密な記述」の他者認識によって、歴史主体の意味づけ、文化の社会的主体の解釈の多様性を拓こうとするのである。⁽¹²⁸⁾

歴史の推進力は、全体の社会的変化と変容過程に対する文化的表現形態と様式、人々の「内面」の再構成とみなされる。この人々の内面の再構成は日常レベルで把握されたものである。それは、支配と経済の文化的社会的構成、構造化、変化との関連において捉えられた日常、社会階層に特殊で歴史的な生活現実の文化的に刻印された行動・解釈関連としての日常である。⁽¹²⁹⁾

(125) Medick/Sabean: „Emotionen und materielle Interessen“, S.34.

(126) Winfried Schulze: „Einleitung“, in: *Sozialgeschichte, Alltagsgeschichte, Mikro-Historie*, S.7 f.

(127) Hans Medick: „»Missionare im Ruderboot«? Ethnologische Erkenntnisweisen als Herausforderung an die Sozialgeschichte“ (1984), in: *Alltagsgeschichte. Zur Rekonstruktion historischer Erfahrungen und Lebensweisen*, hrsg.v. Alf Lüdke, Frankfurt a.M./New York 1989, S.55. 以下も参照。Hans Medick: „Vom Interesse der Sozialhistoriker an der Ethnologie. Bemerkungen zu einigen Motiven der Begegnung von Geschichtswissenschaft und Sozialanthropologie“, in: *Historische Anthropologie*.

(128) Medick: „»Missionare im Ruderboot«?“, S.56 ff., 59 ff.

(129) Medick: „»Missionare im Ruderboot«?“, S.63 f.

社会の矛盾と多様性は主体にまで入り込み、歴史主体の行動における意味づけと文化的自己解釈、意味づけをめぐる闘争は社会関連のコンテキストで行なわれる。相互関連、依存性、抵抗は構造的に所与のものではなく、意味づけをめぐるこの闘争ではじめて現実になるという⁽¹³⁰⁾。まさにこの歴史的主体、主体の経験、現実の意味づけを無視したとして、メディックは社会構造史を批判し、解釈学的やり方と社会人類学・文化人類学の方法への方向転換を主張するのである。

第II章第3節で詳述したように、マイクロストーリーは、小さなもの「を」ではなく小さなもの「において」、つまり、限定された観察領域に集中することによって、歴史認識の可能性の質的な拡大を図り、そうすることで文化的・社会的・経済的・政治的・支配的要素の相互関係を「生活史的関連」として考察し、「社会的関係のネットワークと行動関連の実験的研究」を行なうものである⁽¹³¹⁾。

メディックはレーヴィやギンズブルグに依拠して、マイクロ史的に解明される非常（異常）な個別事例には特殊な証言力があり、それによって日常的で正常な事態・行動・出来事が解明可能となり、新しいものの見方を提供するとみなす。この個別事例を参照基準として、そこから歴史的现象の類似性・共通性と差異性を問うことによって、マイクロストーリーは日常的な特殊性、小さな地域社会で確認される命題を包括的な歴史的関連へと展望し、マイクロストーリーの新しいやり方とマイクロの観察領域において一般的な歴史的解釈が可能であると主張する⁽¹³²⁾。

このマイクロストーリーの考えは個人から出発してそれを「コンテキスト化」するやり方に根拠をもち、セビーアンを通してもたらされたものである。歴史的素材はコンテキストにおいてのみ捉えられ、それゆえコンテキスト化こそが歴史学の本質をなすという考えである。メディックによれば、これは史料の実証主義的把握への逆戻りではなく、文化的・社会的・経済的・政治的契機の同時性が歴史的な行動・出来事の関連、長期の歴史的過程の洞察を可能とする⁽¹³³⁾。

すでに述べたように、メディックはレーヴィやギンズブルグが歴史研究に導入した「非常な通常」概念を利用する。「通常の例外（Normaler Ausnahmefall）」概念は「非常な通常（Außergewöhnlich Normalen）」概念と結びつく。マイクロ史的に把握された個別事例は、歴史的な現象の表層の背後、歴史における人間的な可能性への新しい視点を提供する。個別の比較は作用関連、歴史的に社会的な

(130) Medick: „Missionare im Ruderboot?“, S.72 f.

(131) Hans Medick: „Mikro-Historie“ in: *Sozialgeschichte, Alltagsgeschichte, Mikro-Historie*, S.44 f.

(132) Medick: „Mikro-Historie“, S.47 f. メディックは同年（1994年）、別の論文で、文化人類学的展望においてマイクロストーリーを位置づけている。象徴の意味づけ、知覚・分類様式に注目する文化人類学の観点によって、近代における「他者性」の承認、西欧文化内部での「遠く離れた」歴史への洞察が可能となるという。それは、支配的な文化・経済的中心化と統一化傾向から離脱すると同時に、社会的関係と歴史的变化の独自の推進力としての文化的生活表現と表象の意義を強調する。構造と行動、経済と文化、過程と出来事の対立の向こう側で、この対立が中心主義的歴史展望をどのように特徴づけるのかを議論する。Hans Medick: „Entlegene Geschichte? Sozialgeschichte und Mikro-Historie im Blickfeld der Kulturanthropologie“, in: *Alltagskultur*, S.95 f.

(133) Medick: „Entlegene Geschichte?“, S.98 f.

ミリューあるいは環境の多様性の洞察への鍵とみなされる。メディックによれば、ミクロ分析はコンテキストから検討された限定的社会的事実から、間接的に社会比較を行なうものである。⁽¹³⁴⁾

第2節 マクロ史からの反論

日常史とミクロストーリーは研究対象とする時代がそれぞれ現代史と初期近世期であり、異なるだけではなく、日常史はポイカートのようにマクロ史との密接な関連を看過しているわけではない。とはいえ社会構造史の側からみれば日常史とミクロストーリーの微妙な差異は消え去っている。社会構造史の側からはどのような反論が展開されたのだろうか。本節では日常史とミクロストーリーに方法論上の議論を提起したコッカ、テンフェルデ (Klaus Tenfelde)、ヴェーラー (Hans-Ulrich Wehler)、リッター (Gerhard A. Ritter) の四人を取り上げて検討する。

社会構造史の中心的存在の一人であるコッカは1984年、日常史の特徴を、①構造と過程に集中する理論的かつ分析的な歴史学に対する批判、②歴史の物語に対する新たな評価、以上の二つの点にあると特徴づけ、それに対して社会構造史は、①行動と経験、出来事と個々の人物を決して無視しているわけではない、②物語の要素は存在しているとして、日常史の側からの批判に反論している。⁽¹³⁵⁾

日常史は、伝統的な生活世界、普通の人々の文化、啓蒙と改良に対する「抵抗」を過大評価しており、その一方で方法的には理論や数量化を懐疑し、物語を重視している。そこには「下から」と「内側から」の歴史への幻想があると批判する。社会構造史の理論が経済学・社会学・政治学からきているため、場合によっては人々の希望と不安、経験と行動を周辺に追いやっており、ここに日常史的な挑戦の正当性を認め、必要であれば構造史的一面性が修正されるべきだとする。しかしコッカは経験史によってではなく、構造史と行動史、過程史と経験史の結合を唱え、また、理論なくしては不可能であり、物語への逆戻りは処方箋ではないとして、社会構造史の正当性を強調する。⁽¹³⁶⁾

コッカは1989年に再度、その時点までの15年間の社会史研究を振り返っている。社会史研究は量的な研究から質的な研究に変化し、社会的不平等の多次元的な、不平等の主体的経験を関係させ、量的に把握困難な再構成に至る努力がなされていると一面では評価しつつ、「日常史」はとくに「普通の人々」の経験・知覚・加工・再構成を「ミクロ史的」に実践しているとはいえ、構造と過程を無視し、分析に代わって同情を前面に出して反理論的な無批判な態度と結びつけていると批判する。⁽¹³⁷⁾

(134) Medick: „Entlegene Geschichte?“, S.101 f., 104.

(135) Jürgen Kocka: „Zurück zur Erzählung? Plädoyer für historische Argumentation“, in: *Geschichte und Gesellschaft*, 10, 1984, S.396. 以下も参照。Jürgen Kocka: „Historisch-anthropologische Fragestellungen – ein Defizit der Historische Sozialwissenschaft?“, in: *Historische Anthropologie*, 397 f., 400 ff.: ders.: *Sozialgeschichte. Begriff-Entwicklungs-Probleme*, 2. erw. Aufl., Göttingen 1986, S.162ff. 『社会史とは何か——その方法と軌跡』 仲内英三・土井美德訳 (日本経済評論社, 2000年), 240頁以下。

(136) Kocka: „Zurück zur Erzählung?“, S.403–408.

日常史は民族学・人類学の助けを借りて、「普通の人々」「民衆」「労働者」の意味づけのパターン、生活態度、象徴的慣習という意味で「文化」を押し進めている。日常史は社会科学的な理論をもたず、理論的な反省を行なうこともなく、したがって部分領域を関連づけ総合して全体史を提供しえていないとして、コッカは1980年代半ばよりもさらに激しく日常史を批判した。⁽¹³⁸⁾

社会構造史の陣営の中でも鉱山労働者の社会史で1970年代半ばに登場したテンフェルデは、「日常の現実」概念そのものに疑問を呈する。日常史は現在についての意外なもの、主観的に受け取られた過去に向かっていると批判する。テンフェルデは、日常史が権力に代わって無力の認識、大きなものに代わって小さなものの認識に関心をもつ一方で、概念の喪失によって現在の問題状況を過去のものとして解釈してしまい、「対抗史」にとどまっていると批判する。さらに日常史は歴史人口学、経済・政治史の知的努力から離脱し、認識対象の設問・秩序・類型化から後退しており、知性の喪失であると批判する。⁽¹³⁹⁾

テンフェルデは社会構造史が家族生活、労働者生活、態度様式と欲求を蔑ろにし、知覚形態への繊細さを損なっていることを反省しつつも、「下からの歴史」は党派性、主観主義、認識対象の分割化、概念的な浅さを回避すれば、方法的な意味をもつとみなす。テンフェルデはコッカよりも厳しい表現で日常史を批判するが、「下からの歴史」を「拡大された社会史」へ埋め込む道として、歴史的な態度・社会化・心性の研究と歴史人類学に展望を見出し、この二つにおいては態度構成的かつ存在構成的な条件組立てが研究されており、歴史の主体をその相対的な行動自立性において把握できるとみなす。⁽¹⁴⁰⁾

コッカと並んで社会構造史を牽引してきたもう一人の歴史家ヴェーラーも1985年に日常史に対する批判を展開している。批判の第一点は、日常は全社会的な関連と諸条件の統合的な構成要素であり定義を必要とするにもかかわらず、日常史は多くの現実領域から多くの詳細を蒐集することに限定し、それらに構造的な秩序をもたらさず、機能的・因果的に説明しようとしないうことである。日常史が援用する人類学は問題解決への王道を決して開くものではないという。⁽¹⁴¹⁾

ヴェーラーの第二の批判点は、「感情」を中心に位置づける日常史は集団心理学やヴェーバー（Max Weber）の宗教社会学を参照しないということである。それに対して社会構造史は社会人類学的研究を新しい部分領域として受容しているとみなす。日常史は人々の「被害性」を同情的に再構成す

(137) Jürgen Kocka: „Einleitung“ zur *Sozialgeschichte im internationalen Überblick. Ergebnisse und Tendenzen der Forschung*, hrsg.v. Jürgen Kocka, Darmstadt 1989, S.13 f.

(138) Kocka: „Einleitung“ zur *Sozialgeschichte im internationalen Überblick*, S.15.

(139) Klaus Tenfelde: „Schwierigkeiten mit dem Alltag“, in: *Geschichte und Gesellschaft*, 10, 1984, S.379 ff., 387–391.

(140) Tenfelde: „Schwierigkeiten mit dem Alltag“, S.392 ff.

(141) Hans-Ulrich Wehler: „Alltagsgeschichte. Königsweg zu neuen Ufern oder Irrgarten der Illusionen?“, S.137 f.

るだけで、構造的な秩序に組み入れることができず、したがってミクロストーリーは孤立したままにとどまると主張する⁽¹⁴²⁾

第三の批判は、概念性、理論的な機能的・因果的説明に対して偏見をもつ日常史は、感情移入によって「内側から」問題を解決しようとするが、歴史的主体、日常生活の全体性、「濃密な記述」に依拠し、分析的に理解することができていないことである。日常史は社会ロマン主義的・感情的信条告白を行なっているという。⁽¹⁴³⁾

第四に、日常史は文明批判的なルサンチマン、合理化過程への批判をもち、敗者への同情的な関心、民衆の前工業的生活の牧歌化を過大評価する一方で、近代化によって生活チャンスが改善され、生活リスクが減少し、社会的不平等が弱まる側面を無視している、と批判する。⁽¹⁴⁴⁾

ヴェーラーの批判はさらに続くが、おおよそのアウトラインは、①「下から」の歴史は多層的な全体像に至る通過点にしかすぎず、社会全体の歴史を描けない、②「普通の人々」が「下から」の歴史を規定するのではなく、資本主義、官僚的機構への合理化過程の「進歩」、「世界の魔術からの解放」が「下から」の歴史を規定する、③社会構造史は日常を無視してもいないし数量化を過大評価してもいない、歴史学の道は心情と感情を通してではなく、理解と批判的言説を通してであるというものである。⁽¹⁴⁵⁾

リッターも少し後の1989年にドイツの社会史研究を概観し、社会構造史が70年代末以降、日常史における経験、文化、生活世界の新しい強調によって後退していると判断しつつ、将来的には、社会史研究の隔離化、ドグマ化が克服され、方法・見解・研究領域の多元主義はチャンスと捉えられと楽観的な見方を提示した。⁽¹⁴⁶⁾

リッターは日常史を以下のように批判している。第一に、日常史概念が不明確であり、そもそも「日常」概念そのものが全く利用できない歴史的ないし社会学的カテゴリーである、第二に、日常史は経営の日常など人間の生活の多くの領域と多くの社会的集団を排除する、第三に、日常史は学校、軍隊、教会、国家・地方自治体社会政策の制度、あるいは社会下層民の自己組織が社会下層民にどのような影響を与えたのかという問題を提起していないと批判する。人間の経験と意識では歴史的現実の一部だけしか存在しないことになり、経済的社会的構造と過程、支配体系と支配メカニズムは人々の生活にとって重要であり、こうした制度、制度に関わる人物の理念や目的が歴史研究に組み込まれねばならないと強調する。こうしてリッターは、理論から導かれる概念、数量的なデータの利用、構造と過程の分析が必要であり、近代社会史の課題は理論と普遍的な概念なしにはできな

(142) Wehler: „Alltagsgeschichte. Königsweg?“, S.139 f.

(143) Wehler: „Alltagsgeschichte. Königsweg?“, S.140 f.

(144) Wehler: „Alltagsgeschichte. Königsweg?“, S.143 f.

(145) Wehler: „Alltagsgeschichte. Königsweg?“, S.145, 148–151.

(146) Gerhard A. Ritter: „Die neuere Sozialgeschichte in der Bundesrepublik Deutschland“, in: *Sozialgeschichte im internationalen Überblick*, S.88.

い構造史、経験史、出来事史の結合にあるとして歴史的社会科学の存在意義を主張する。⁽¹⁴⁷⁾

このように、社会構造史の側からの日常史批判には若干のニュアンスの違いはあるとはいえ、基本的な批判的立場は共通している。

VII. 日常史の変容——1980年代後半以降

以上みてきたように、1980年代半ばにマイクロ史とマクロ史の対立という形で展開された歴史学上の議論は、日常史・マイクロストーリーと社会構造史の対立であった。社会構造史的な立場からの批判に対して、日常史の側からのその後どのような反応があったのだろうか。1987年に、「歴史工房」が日常史の立場からのファシズム分析に関する論文集『正常性か正常化か？ 歴史工房とファシズム分析』を刊行している。「序」において、編者のゲルステンベルガー（Heide Gerstenberger）とシュミット（Dorothea Schmidt）が、人々の私的経験と政治の機能様式の体系的関係を明らかにする必要性を強調している。⁽¹⁴⁸⁾

リュトケはそこに所収された論文において、ナチ期における人々の実践を、切り抜け・受け入れ・共犯の多様な実践諸形態として表現し、そうした実践諸形態が歴史過程においてどのような意義をもっていたのかを明らかにしている。日常史の課題はこの人々の実践と経験、人間がその想起と意味づけを言語化する「意見」の多様性を明らかにするところにあるという。ドイツ・ファシズムにおける人々の支配か抵抗かではなく、両者の間にある多様な態度の同時性、日常の「濃密な」分析から、人々の生き残り戦略と自己形成の同時性を明らかにすることの重要性を強調する。⁽¹⁴⁹⁾

編者の一人であるゲルステンベルガーは、日常史研究とファシズム論との関係に関する論文において、ファッショ化における「公的言説」の社会的実践（ブルデュー）が成り立ちうるのは、そこには日常レベルでの人々の主体的経験における参画があるからであり、「体制」による「日常」の圧倒ではなく、公的な言説の支配は多くの人々の参加によってのみ生じたからであると主張する。ゲルステンベルガーは、日常概念を、行動の構造的諸条件が人々による知覚と出会うカテゴリーとして捉える。この日常研究の意義は、日常生活の客観的な構造の叙述にも主体的な経験の叙述にも限定されず、「社会的実践」の分析、ファッショ化の過程の分析と同時にファッショ的支配実践の現実化の解明を行なうところにあるとみている。⁽¹⁵⁰⁾

(147) Ritter: „Die neuere Sozialgeschichte“, S.61 f.

(148) Heide Gerstenberger/Schmidt, Dorothea: „Einleitung“, in: *Normalität oder Normalisierung? Geschichtswerkstätten und Faschismusanalyse*, hrsg.v. Heide Gerstenberger und Dorothea Schmidt, Münster 1987, S.10 f.

(149) Alf Lüdtke: „'Formierung der Massen' oder: Mitmachen und Hinnehmen? ‚Alltagsgeschichte' und Faschismusanalyse“, in: *Normalität oder Normalisierung?*, S.17 ff., 24 ff.

(150) Gerstenberger: „Alltagsforschung und Faschismustheorie“, S.40–45.

1989年にはリュトケは自ら『日常史』を編集し、その「序章」で、「普通の人々」の日常的な行動を扱う日常史は、この人々が社会的関連の中で知覚し行動するという意味で「社会的実践」をするという考えをもっているとみなした。したがって日常史の中心課題は、人々の意味づけ、知覚、方向づけの様式を再構成すること、つまり、日常的態度と経験と方向づけの間を媒介することにある。この「意味づけ」がこれまでの社会構造史との大きな違いであり、社会構造史の対象たる利害と客観的強制の分析と解釈は意味づけによって知覚されるという考えである。リュトケはさらに、普通の人々がこの利害と客観的強制から被る被害の経験と、これに対する別の選択肢の構築とそこへの参画という行動の方向づけの二重性を強調する。⁽¹⁵¹⁾

その5年後の1994年、ベルリンの「歴史工房」が日常史の理論と実践に関する論文集『日常文化』を公刊した。その序文で「歴史工房」は80年代半ばに始まった「下からの歴史」としての日常史の挑戦を総括している。社会構造史の客観主義的な歴史理解に代わって、日常史は人間の日常経験と具体的な生活様式を歴史的関心の中心においた。「開放性、複雑性、多義性、暫定性」が日常史の概念であった。歴史的関心はもはや「何が」起こったのかではなく、「どのように」一定の発展が個々の人間と集団によって経験されたのか、どのようにこの発展が知覚され、加工され、押しのけられたのかを明らかにすることにあるという。⁽¹⁵²⁾

同時代の観点から人々の内的・心理的経験を見出そうとする日常史は、日常史の資料を産出する方法としてオーラルヒストリを駆使し、したがって主体の視点、個人と集団の日常経験と行動能力の視角からの歴史である。⁽¹⁵³⁾この日常史の観点はこれまでと変わるものではない。しかし歴史学における認識論上の議論の変遷においてみると、そこには従来の日常史そのものの変化が浮き彫りになる。

「過去についてのテキストは過去そのものではない。」この基本的洞察は同時代の日常資料にも記憶インタビューにも当てはまる。そこから可能なのは、資料の信憑性を批判的に分析し掘り起こすことである。「歴史工房」は、「意味があり、有意義なものとしての社会的現実」は「コミュニケーションと相互関係の形態」でのみ、つまり「象徴的にのみ媒介される」ことができるとみなす。知覚と現実のこうした象徴的形態は、「意味的な操作」と「質的な相互関係のやり方」の助けを借りて把握できると主張する。文化と生活形態の多数性に直面して、歴史的社会科学のもつ一体的な世界像はその有効性を失ったとして「歴史工房」は社会構造史を批判し、日常史の有効性を謳う。⁽¹⁵⁴⁾

すでに述べたように、こうした主張は1980年代までには提起されていなかった。日常史はあくまで現実の生活の再構成を行なおうとしていたからである。80年代から90年代にかけて日常史が「言語論的転回」の影響を受けたことを物語るものである。

(151) Alf Lüdtke: „Einleitung. Was ist und wer treibt Alltagsgeschichte?“, in: *Alltagsgeschichte*, S.9, 11 ff., 21 f., 31.

(152) Berliner Geschichtswissenschaft: „Einleitung“ zur *Alltagskultur*, S.7.

(153) Berliner Geschichtswissenschaft: „Einleitung“, S.9 f.

(154) Berliner Geschichtswissenschaft: „Einleitung“, S.10 f.

これは同時に、国家から社会への方向転換、政治から離脱し「社会的なもの」への転換であった社会史が政治へ回帰する動きをも意味した。イギリスのドイツ史家イリー（Geoff Eley）はこの関連でイデオロギーの新しい理論、心理分析論、ポスト構造主義言語論、フーコーの権力論を引き合いに出す。1980年代末までに、新しい経験領域、ラディカルな政治、理論的なもの、これらの相互作用が社会史研究に、政治の新しい理解をもたらしたという。こうして社会と政治が統合される過程が出てきた。⁽¹⁵⁵⁾

イリーはナチスに関する日常史研究に言及し、ナチ秩序の強化と作用における普通の人々の共犯性を強調した歴史研究を取り上げる。構造と過程の「内側」を考察することの重要性、人間が具体的な生活状況で獲得する日常的経験を明らかにする研究こそ、日常史が展開しているとして、政治的な歴史と社会的な歴史の結合として日常史を評価する。イリーはさらに、人々がその生活を生きた矛盾へ接近することを可能にしたのがミクロストーリーであるとして、その延長線上でリュトケの「勝手気儘」概念、換言すれば、疎外された社会関係を再領有することが重要となるという。⁽¹⁵⁶⁾

ナチスの支配下で労働者が生き残ることが可能になったのは、この勝手気儘を求める労働者文化を基礎とした日常文化であり、しかし同時に、この勝手気儘は生き残りだけではなく共犯性を保証するものでもあった。⁽¹⁵⁷⁾ こうした二重性を浮き彫りにしたのが日常史ということになる。

この二重性をリュトケ自身が同じく1994年に「日常史」に関する論考で強調している。リュトケは、歴史的日常に関する問題が独自の力学を発展させ、人々が支配関係、暴力形態、他者に対する残忍性を我慢しただけではなく、進んで暴力と残忍性への積極的関与と共犯性を提起したことを詳らかにしている。国家による大量殺人を可能にした態度様式、共犯あるいは切り抜けの実践の諸形態をどう理解するのかを問題にする。⁽¹⁵⁸⁾

リュトケによれば、経験史以上のものと自負する日常史は、人間の実践、すなわち、人間が自分の行動と意味づけの諸条件を獲得し、経験を生み出し、表現様式と意味付与を利用し、新たに強調する形態に注目する。人間は自分の歴史を与えられた諸条件の下で、自分自身でつくと主張するのである。⁽¹⁵⁹⁾

リュトケは先に挙げたベルリン「歴史工房」編集の『日常文化』所収の論文「歴史と勝手気儘」において、「日常」概念と「勝手気儘」概念を説明している。日常において想定されるのは、人間の生活様式、人間が生産様式と支配形態を領有する形態と実践であり、この領有する人間は、モノと状

(155) Geoff Eley: „Wie denken wir über Politik? Alltagsgeschichte und die Kategorie des Politischen“, in: *Alltagskultur*, S.17 ff.

(156) Eley: „Wie denken wir über Politik?“, S.26 ff.

(157) Eley: „Wie denken wir über Politik?“, S.30 f.

(158) Alf Lüdtke: „Stofflichkeit, Macht-Lust und Reiz der Oberflächen. Zu den Perspektiven von Alltagsgeschichte“, in: *Sozialgeschichte, Alltagsgeschichte, Mikro-Historie*, S.75 f.

(159) Lüdtke: „Stofflichkeit“, S.72.

況の現実を変化させ、同時に頭の中の世界と歴史の知覚の様式を変えもするアクターとみなされている。日常的な実践は統一的なわけではなくさまざまであるとして、ナチ期でいえば、支配と抵抗のどちらでもない態度、この勝手気儘にリュトケは注目する。人々の自己活動、勝手気儘は権力の側の支配と搾取の拡大と同時に権力強制への対抗でもあるとする。個人の態度様式の見通しのなさを示す勝手気儘は、支配と抵抗とは異なる「第三のもの」として構想されている。⁽¹⁶⁰⁾

歴史的变化、態度様式の変化を勝手気儘な噴出と位置づける際にリュトケが依拠するのはブルデューである。リュトケによれば、勝手気儘は明確な目標を認識させない態度様式であり、ナチ期に勝手気儘は搾取の「甘受」の橋台として作用し、他者の残忍な排除を容易にしたという。⁽¹⁶¹⁾

最近の動向を踏まえて、歴史学の構想・観点・方法論から日常史の特徴をまとめておこう。

伝統的歴史学が人物・出来事・政治史に重点をおいていたのに対し、社会構造史は経済的・社会的・政治的「構造」に視点を移し、「構造」と「過程」に歴史形成力を見出した。この社会構造史に対して日常史は歴史における個人の主体を復活させた。ただし日常史は歴史主義の人物中心主義ではなく、「普通の人々」の主体的経験、知覚、意味づけを研究関心の前面においている。⁽¹⁶²⁾

社会構造史が伝統的歴史学に対して提起した全体としての「社会」概念に対抗して、日常史はこの経験・知覚・意味づけを「文化」概念に包括させた。⁽¹⁶³⁾文化人類学から受容された「文化」概念は「濃密な記述」、「人類学的な眼差し」とならんでモードとなったともいえよう。しかしその半面、多くのものが「文化」に投げ込まれ、方法論上の混乱をもたらし、「濃密な記述」の具体像は必ずしも明確になっているとはいえない。⁽¹⁶⁴⁾

社会構造史が学際性を強調し、歴史的社会科学として諸学問の総合化を主張したのに対し、日常史は、統合する学問などは存在せず、すべてが局面の学問だと主張（脱中心化）しているのは確かであるが、⁽¹⁶⁵⁾「大きな物語」に対して「小さな物語」（断片化）を対置したというよりもむしろ、「勝手気儘」概念にみられるように、あえていえば「別の大きな物語」を提起しているのである。

VIII. 結論的考察

本稿で扱った「日常史」と「歴史人類学的社会史」は、社会構造史に対抗して、文化的次元を社会

(160) Lüdtkke: „Geschichte und *Eigensinn*“, S.145 ff.

(161) Lüdtkke: „Geschichte und *Eigensinn*“, S.149 f.

(162) Hardtwig: „Alltagsgeschichte heute“, S.21, 25; Hardtwig/Wehler: „Einleitung“, S.8 f.

(163) Hardtwig: „Alltagsgeschichte heute“, S.23 ff.

(164) Sokoll: „Kulturanthropologie und Historische Sozialwissenschaft“, S.254 f. ル=ロウ=ラデュリの『モンタイユ』とギンズブルグの『チーズとうじ虫』に対する批判的評価については Sokoll: „Kulturanthropologie und Historische Sozialwissenschaft“, S.256.

(165) Hardtwig: „Alltagsgeschichte heute“, S.26.

史の研究対象にする「文化史的に拡大された社会史」であり、ここでは民族学、社会人類学ないし文化人類学が、歴史学にとって依拠すべき新しい主要学問になっている。近代化論と歴史的变化の特権化から離脱して、地域性と生活世界、人間存在の人類学的基礎に注目する。この社会史は、人間の知覚・意味づけの様式を、その生活の社会的・政治的・経済的・物的様式的生活諸条件との関連で考察しようとする。⁽¹⁶⁶⁾

ダニエルは、女性史や日常史などを、社会史の「より強く解釈学的に適用された象徴的な社会史」への転換として位置づけ、この象徴的社会史は、「意味を付与し価値づけ意味づける歴史的主体の活動」を「あらゆる社会的世界の構成的契機として、最後には『現実なるもの』の作用力を可能にするもの」として扱う。「社会的政治的権威ないしは権力」は、これがこの主体によって「知覚され、人間の社会的実践において承認されてはじめて」、権威をもち権力的となる。⁽¹⁶⁷⁾

「新しい文化史」はこうした文化史的に拡大された「象徴的社会史」とは根本的に異なる歴史学とみなす。この「新しい文化史」は象徴的な歴史ではなく、知覚様式と心性への関心、歴史的知覚様式と意味付与様式への関心をもつ歴史学である。新しい文化史は民族学・文学・哲学からの支援を受けて文化科学に解放される歴史学であるということになる。⁽¹⁶⁸⁾

メディックは1994年にマイクロストーリーを概観し、マイクロストーリーは日常史の兄弟であるとはいえ、独自の道を歩んでおり、より積極的に方法論的に吟味してこれまでの社会史のカテゴリーを修正しており、社会史の民族学的・文化人類学的挑戦であり、「方法の転回 (Methodenwechsel)」を内包するものだと強調する。しかも興味深いことに、マイクロストーリーがマクロ史の総合テーゼという構想、つまり歴史研究・解釈・叙述の結合の構想を超えて「ポストモダンの断片化」に出口を探しているという。⁽¹⁶⁹⁾

このメディックのマイクロストーリーの回顧ならびに日常史の議論を視野に入れると、1970年代後半から80年代半ばまでのマイクロストーリー・日常史の成立と、その後90年代に至るマイクロストーリー・日常史の展望とが部分的には異なることが明らかになる。社会構造史に対抗して、あくまでも社会史の枠内で「新しい社会史」として挑戦し成立したマイクロストーリー・日常史は、90年代には学問的展望としては社会史を超えて、部分的には「新しい文化史」として展開していくことになったのである。この「新しい社会史」から「新しい文化史」への転換には「ポストモダン」の影が覆っている。

2000年代の後半にメディックは1970年代後半から80年代における自分たちの歴史学の変遷を

(166) Daniel: *Kompendium Kulturgeschichte*, S.301–304.

(167) Ute Daniel: „Quo vadis, Sozialgeschichte? Kleines Plädoyer für eine hermeneutische Wende“, in: *Sozialgeschichte, Alltagsgeschichte, Mikro-Historie*, S.60.

(168) Daniel: *Kompendium Kulturgeschichte*, S.11–14.

(169) Medick: „Mikro-Historie“, S.40, 42 f.

振り返っている。その際メディックは本稿第 III 章第 2 節で取り上げた「77 年草稿」の位置づけを行ない、77 年草稿は批判の対象とした社会構造史とそれほど変わらないとして自己批判している。その理由は、その後 80 年代に入って日常史が登場し、文化人類学的なマイクロストーリーが成立したからである。この転換の契機となったのがアメリカの文化人類学と歴史学、イギリスの社会史研究、さらにブルデューの「理論」であり、これによって、社会構造史の近視眼を超えることができたという。⁽¹⁷⁰⁾メディックとリュトケたちは、日常史・歴史人類学・マイクロストーリーの新しい方向に直面して「勝手気儘」概念に到達した。⁽¹⁷¹⁾

ヴェーラーは 1987 年刊行の『ドイツ社会史』第 1 巻において、社会構造史の核となる経済・社会・支配に第四の局面として「文化」を追加した。社会構造史において文化は社会の一局面として位置づけられている。⁽¹⁷²⁾

社会構造史は社会学・経済学・政治学の理論と概念を引き受け、社会・経済・政治の構造と過程の長期的な変化を系列的数量的に考察したのに対して、メディックは、社会構造史によっては構造の成立そのものは明らかにならないとして、客観的構造と主体的経験を相互に結びつける社会史を構築しようとした。その際に依拠したのがギアーツなどの解釈学的象徴的人类学であった。文化には新しい意味が付与され、「自分自身が張りめぐらした意味の網」として「文化」が把握されている。こうした文化人類学的発想が社会史に導入されることによって、人間の日常的行動、人類学の「濃密な記述」、総じて「文化」が社会史に包含されることになった。今や、文化が歴史学の「大概念（概念的核）」となっているかのごときである。⁽¹⁷³⁾

第 II 章で詳述したフランス歴史学における心性史から「新しい文化史」への方向転換とマイクロストーリーの登場と関連させて、ドイツにおける歴史学の展開を眺めてみよう。「政治社会史」に特化したドイツの社会構造史に対抗して、日常史や歴史人類学というドイツの「文化史的に拡大された社会史」を「新しい社会史」と特徴づけておこう。この「新しい社会史」は社会構造史批判の根拠として欧米の文化史的歴史研究を受容した。しかし欧米の歴史研究はドイツとは異なり、政治社会史に対してではなく、数量史・系列史・心性史研究に対抗して「新しい文化史」として実践されていた。この「新しい文化史」をドイツの歴史家は政治社会史に偏った歴史的社会科学を批判するた

(170) Medick: „Geschichte – für wen?“, S.33 ff.

(171) Medick: „Geschichte – für wen?“ S.40

(172) Hans-Ulrich Wehler: *Deutsche Gesellschaftsgeschichte*, Bd.1, München 1987, S.11 f.

(173) Clifford Geertz: *The Interpretation of Cultures. Selected Essays*, New York 1973. ギアーツ『文化の解釈学』I, 吉田禎吾他訳（岩波書店, 1987 年）, 6 頁。Ulbricht: „Mikrogeschichte“, S.349–352, 360 f. メディックは文化の歴史形成力を強調した。しかし文化が変化を引き起こしたとすれば、何が文化の変化をもたらしたのか？ 文化の社会的政治的コンテクスト、その構造的変化の問題に遭遇することになる。因果関係と変化という問題が重大な問題となる。Ulbricht: „Mikrogeschichte“, S.362. メディックたちが構造と過程が歴史形成力とする社会構造史を批判して、それに代わって文化概念を提示したが、同じ批判がメディックたちに提起されることになる。

めに受容した。つまり、数量史・系列史・心性史研究を経ないドイツの歴史学においては、社会構造史を批判するために、ドイツの歴史学においては定着していなかった「新しい文化史」が導入されたのである。「新しい文化史」がドイツに受容されて「新しい社会史」に転化したのである。その意味ではドイツ的な受容であった。

〈量〉そのものが歴史研究において定着していなかったドイツにおいて、〈量〉に対抗する〈質〉としての「新しい文化史」が受容された。〈量〉に対して〈質〉そのものをどのように扱うのか対決を迫られることのなかったドイツの歴史学において、「新しい文化史」が導入されて「新しい社会史」として展開された。そもそもドイツでは心性史は根づかず、「理念」「精神」がドイツの歴史学において大きな役割を果たし、人間の思考・態度様式は数量的なやり方と系列的なデータではなく、解釈学的方法で考察されてきた。歴史人類学や日常史も構造に対して個人を強調しており、個人が重要な位置を占めない心性史にはそう簡単には飛びつかなかった⁽¹⁷⁴⁾。「言語論的転回」も導入されるが、史料に基づく歴史研究の放棄に至らず、オーラルヒストリと自伝研究を追加する形でむしろ歴史研究の豊富化がもたらされた。結果的にドイツでは、「新しい文化史」は解釈の「もう一つ別の」あり方として導入されたのである。

1980年代末のドイツで「想起と記憶」の議論が盛んとなった。とりわけドイツでは、ナチ時代の過去との関わり、過去の責任の問題が重要な役割を果たした。歴史学的には、構造を重視する社会構造史の視点に対抗して、個人の記憶と集合的な記憶の間を媒介する概念として想起と記憶が重要な位置を占めた。その際、想起は過去との主体の関連を表現するものとされ、歴史（過去）は主体から独立したものではないという構築主義的な考えが基礎にあった。しかしノラたちの「記憶の場」研究は、ドイツでは少なくとも80年代においては重要な位置を占めなかった。というのも、「ホロコーストの表象」をめぐる問題が主体によるプロットの恣意性を許さなかったからである⁽¹⁷⁵⁾。

社会構造史に対抗する「新しい社会史」の共通性は、普通の個人から出発し、諸個人による経験の意味づけ、その解釈学的方法に依拠した考察を行なっていること、その視点はミクロの「小さな単位」におかれていることにある。しかし小さなモノ「を」見るのではなく小さなモノ「において」見るところにこのミクロ史的観点の特徴がある。「小さなモノ」は自己目的ではなく、同時に「大きなモノ」を示すものとみなされており、したがって「新しい社会史」の意図からすれば、ミクロ史とマクロ史は矛盾しないということになる。

「新しい社会史」は「新しい文化史」を導入することで社会構造史と対抗しようとしたが、新しい社会史はあくまで社会史の枠内での歴史学であり、社会を前提にし、社会を考察の対象としている。とはいえ、新しい社会史は社会構造史とは異なる「社会」概念をもつ。「社会」は「日常生活

(174) Jordan: *Theorien und Methoden*, S.166 f.

(175) Jordan: *Theorien und Methoden*, S.168 f.

世界」と歴史主体としての人間によって刻印され、集合的経験世界とその意味づけが重要な位置を占める。このことは、「日常生活世界」が「現実」と同時に「構成」としても理解されていることを示している。すなわち、1990年代以降に展開する歴史学の議論はすでにこの時点で出現していたのである。社会構造史と「新しい社会史」の間には根源的対立がすでに存在していた。

伝統的歴史学に対抗して歴史的社会科学として登場した社会構造史は、アメリカの「近代化論」に依拠して歴史研究を主導していった。それに対して、新たな歴史研究は、別の方向からの学問的関心、とりわけ「日常生活世界」「人類学」「民族学」から多大な影響を受け、日常史や歴史人類学的社会史として展開された。こうした転換から浮き彫りになる歴史学は「文化的に拡大された社会史」として展開されることになる。しかしこの新しい社会史は「言語論的転回」や「ポストモダニズム」に親和性が強く、「新しい文化史」への転回は容易に実行された。部分的には「ポストモダニズム」へ踏み込んでいもいる。

本稿では、現在の「新しい文化史」をめぐる議論そのものではなく、1970年代後半～80年代に展開された歴史学の論議、すなわち、歴史的社会科学とそのパラダイムに対抗した「日常史」・「歴史人類学的社会史」の挑戦を通して、歴史学においてどのような議論がなされたのかを検討した。主として「日常史」と「歴史人類学的社会史」の領域で、歴史研究の方法と観点、問題設定や研究対象に関して激しい議論が展開された。構造と過程の歴史形成力に重点をおく「社会構造史」に対抗して、日常史・歴史人類学的社会史は歴史過程にとっての人間諸個人の経験と行動の意義を重視していた。両者は歴史研究の対象としての「社会」の存在については疑うことはなく、「社会史」であることを前提としていた。日常史・歴史人類学的社会史は社会史の一環として、その上で社会構造史とは異なり、「新しい社会史」、すなわち「文化史的に拡大された社会史」として自己認識していた。

ドイツの歴史学において登場した「新しい社会史」、この転換の契機はアメリカの文化人類学と歴史学、イギリスの社会史研究、ブルデューの「理論」などであった。ドイツの「新しい社会史」が依拠したのは、興味深いことに社会史を批判し、「社会」概念に代わって「文化」概念を核にした「新しい文化史」である。「新しい社会史」を含めて社会史に対する対抗モデルとして位置づけられる「新しい文化史」の登場の背景には、「言語論的転回」と「ポストモダニズム」を媒介とした「社会」から「文化」への重点移動が確認できると考えられるが、その問題についてはもはや本稿では検討できる余裕はない。

要旨: 本稿では、1970年代後半から80年代半ばに（西）ドイツの歴史学において議論された問題、「歴史的社会科学」か「社会史の文化論的転回」かという議論に焦点を当てる。歴史的社会科学とそのパラダイムに対抗した「日常史」・「歴史人類学的社会史」における歴史研究の方法と観点、問題設定や研究対象に関する議論を追い、この「社会史の文化論的転回」への歴史研究の展開過程を解明する。欧米の歴史学との比較において（西）ドイツ歴史学の特徴を浮き彫りにする。

キーワード: 歴史的社会科学, 日常史, 歴史人類学, 社会史, 文化論的転回